

かけがわ学力向上ものがたり  
— 我が校のものがたり 実践編 —



「茶のみやきんじろう」◦掛川市

令和3年2月  
掛川市教育委員会



## 「子どもたちの未来のために」

「ここがわからない。〇〇さん、教えて。」「これがこうだから、こうじゃん。どうかな?」「なるほど。わかった。」「あれ?じゃあここをこうしたらどうかな?」「あ、それもいいね。それでもいいじゃん。」

教室では、子どもたちが自分の考えを伝えたり友達の考えを聞いたりしながら、様々な問題を解決しようとして一生懸命取り組んでいます。そこには、一人一人の子どもの「ものがたり」があります。そして、そのものがたりを支える先生の「ものがたり」もあります。

掛川市教育委員会では、「学力」とは何かを、学校、家庭、地域で共通理解をし、どのようにしたら学力の向上が図れるか、その理念や方法等を「ものがたり」としてまとめた「かけがえ学力向上ものがたり」を策定しました。

学校では、夢に向かって自ら考え自ら判断し、心豊かにたくましく生きる子どもの育成につながるよう、日々の実践の中で、主体的・対話的で深い学びの実現を目指しています。本年度も、児童生徒の学習状況に基づいた学校独自の特色ある「我が校のものがたり」を作成し、全教職員が共通理解のもと、学力向上への積極的な授業改善を進めてきました。

この度、本年度の「我が校のものがたり」による実践の中で、特に成果が表れた代表的な実践をまとめ、一冊の本にすることができました。各学校並びに、実践報告を提出していただいた先生方におかれましては、御多用の中、多大なる御協力をいただき、誠に感謝申し上げます。子どもたちの実態に応じた素晴らしい実践の数々から、子どもたちの充実した学びの姿が想像できます。

今後も、掛川の子どもたちの学力向上に向けて、学校、家庭・地域、教育委員会が連携して、子どもたちの未来のための教育活動の充実に努めてまいります。

掛川市教育委員会

## 目 次

日坂小学校 石野 拓也	1
東海道の歴史を紐解く～地域から学び、学びを地域に発信していく～	
東山口小学校 廣住 悠乃	3
内容ベースの授業から資質・能力ベースの授業へ	
西山口小学校 白松 麻友子	5
作ろう！3年2組食べ物図鑑	
上内田小学校 松本 昌幸	7
ピンチはチャンス「自らみんなと学ぶ」	
城北小学校 由井原 佑	9
真の対話活動を目指して…	
第一小学校 坂部 暢之	11
主体的に学ぶ子の育成 ～「掛ージャンプ」にチャレンジ！！～	
第二小学校 石黒 幸志	13
対話を通して思考を深める掛二っ子	
中央小学校 大越 才生	15
「観」の転換 ～ちゅうおう型学びのスタイルを求めて～	
曾我小学校 雲母 政敏	17
学校力を尽くしてコロナに立ち向かった授業づくり	
桜木小学校 平野 良直	19
どの子ども学び続ける授業の創造	
和田岡小学校 山口 真弓	21
主体的に学ぶ子どもたち	
原谷小学校 兼子 知也	23
子どもが学びに向かう力を育む授業 ～「まとめ」と「活用」を視点として～	
原田小学校 池田 健	25
つなぎ言葉で思考を広げよう！	
西郷小学校 鷺山 智久	27
共によりよく生きていく力を育てる道徳授業	
倉真小学校 池田 勇太	29
「～たい」にあふれる、かがやく子	



土方小学校	渡辺 智美	3 1
友達との対話を通して、思考する		
佐束小学校	高橋 万浦	3 3
対話を通して考えを深める授業		
中小学校	富井 美帆	3 5
対話を通して考えを深める授業 ～考えを深めるために～		
大坂小学校	浅野 恵子	3 7
学びで心の鐘をひびかせよう！		
千浜小学校	諸星 江里	3 9
「主体的に学び合う子」を目指して		
横須賀小学校	阿形 竜馬	4 1
話し合い活動を通して「できた」「わかった」を共有する授業		
大淵小学校	石田 智子	4 3
「自ら考え 進んで自分の言葉で伝え合う子」が育つ授業		
栄川中学校	高橋 達也	4 5
栄川中のものごと		
東中学校	杉山 晃弘	4 7
短歌っておもしろい！		
西中学校	長谷川 景子	4 9
子どもが主役の授業を目指して		
桜が丘中学校	川中 瑞貴	5 1
深い学びを達成するために		
原野谷中学校	池田 直茂	5 3
いろいろな工夫にあふれた数学		
北中学校	萩田 駿	5 5
自分と向き合う時間で未来を育む		
城東中学校	杉山 高久	5 7
掛川市の未来に提言！～対話を通して考えを深める授業～		
大浜中学校	八木 秀樹	5 9
平家物語～力が付いたと実感する授業～		
大須賀中学校	池谷 貴弘	6 1
生徒が互いに学び合う授業を目指して		

## 東海道の歴史を紐解く～地域から学び、学びを地域に発信していく～

掛川市立日坂小学校 石野 拓也

東海道五十三次の25番目の宿場町として古くから開けた日坂宿。そんな宿場町に位置するのが開校148年目を迎える歴史深き日坂小学校です。学区は北部に茶業が盛んな山間地が広がり、日坂と東山の2地区からなっています。

「自分たちの住む地域のことをもっと知りたい。知ってほしい。」

総合的な学習の時間（わくわく）を通して、進んで地域に関わり、学んだことを自分なりに表現していく6年生15人の取り組みを紹介していきます。

### 日坂、東山の魅力とは？～主体的な学び～

「自然が豊か！」「様々な歴史がある！」「人が温かい！」

子どもたちは次々と魅力についてこう答えました。すかさず、教師が歴史について切り返すと、

「昔、日坂宿がありました。」「夜泣き石伝説がある。」「粟ヶ岳には無間の井戸がある。」

と答える子どもたち。しかし、その答えは漠然としており、具体的に説明できる子はほとんどいませんでした。

すると、その授業の翌日、

「先生、家の人に夜泣き石伝説について聞いてきました。」

「友達と粟ヶ岳に行って、実際に見てきました。」

と、話す子どもたちの姿が見られました。これらは教師が指示したことではありません。日坂小学校では、問題を自分事として捉え、自ら解決していこうとする主体的な学びを大切にしています。

### 地域の方から学ぶ～地域と繋がり、知識を繋げる～

本校は保護者や地域住民の皆様との協働で教育活動から環境整備に至るまで多様な協力を得て学校づくりを進めています。総合的な学習の時間でも、4名の地域の方を講師として招き、「日坂宿」や「小夜の中山・夜泣き石伝説」、「粟ヶ岳」等について講話をいただきました。子どもたちのことをよく知る講師の方に話をしていただくことで、地域への関心の高まりにも繋がっています。子どもたちは書籍やインターネットを中心に調べた知識と講話の内容を比べながら聴くことで、より確かな知識とし、深い学びへと繋げていくのです。

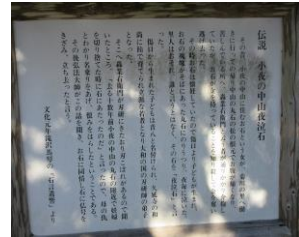
## 体験から学ぶ～確かな学びに～

歌川広重作「日坂小夜ノ中山」の絵を見ると、急な坂道が目につきます。

「昔の人はわらじで長い距離を長い時間歩いて大変そう。」  
日坂宿の歴史について知っていくと、このような思いが生まれます。『わらじを作って、小夜の中山峠を歩こう』という学習に繋がっていきました。これまでに調べたり、話を聞いたりして得た知識を実際に体感することでより確かな学びになっていくのです。



9月、地域の方を講師に招いて、わらじ作りをおこないました。形が不揃いになってしまったり、思うように編み込めなかったりと悪戦苦闘しながらも自分だけのわらじができました。11月、いよいよ作ったわらじを履いて小夜の中山峠を歩きます。初めは意気揚々と歩く子どもたちも急な坂道に疲れが見え始めます。わらじが指の間に食い込み歩く度に痛み出します。実際に歩いてみたからこそ、当時の人々の苦労を感じることができました。また、多くの歌碑や石碑を見つけたり、お寺の名前の由来を知ったりすることもできました。これまで学んだことが体験を通して、より確かな学びに変わっていきました。



## 地域へ発信する～ICTを活用してまとめ、自分なりに表現する～

「地域の一員として学んだことを地域に広めたい。」

学習発表会に向けて、これまで学んだことをタブレットを使ってまとめていきます。何をどのようにまとめたら伝わるのかという視点をもって子どもたちどうして交流活動をおこないました。「調べて分かったことだけじゃなくて、感じたことも話した方が伝わるんじゃないかな。」お互いの発表を聞き合い、改善点を見つけ、より分かりやすく表現する活動へと繋がっていきます。写真の提示の仕方にこだわったり、クイズを取り入れたり、自分なりに表現しようとする姿が見られました。

初めは漠然とした知識だった地域の歴史でしたが、主体的に学習を進めることで、学習発表会では保護者や地域の方々、下級生に向けて堂々と表現することができました。

日坂小学校では、今年度「進んでかかわり学び合う子」を育成するため、子どもの「自分の思いや考えをもち、わかりやすく表現する姿」、「考えを比べながら聴き、学びを深める姿」を目指して学習活動をおこなってきました。今後も一人ひとりが学びを深めていけるように、素直で温かい日坂小の子どもたちと教員が一丸となって教育活動に取り組んでいきます。

# 内容ベースの授業から資質・能力ベースの授業へ

掛川市立東山口小学校 廣住 悠乃

C1 「『かさ』と『長さ』って、何か似てる気がする。」  
 T 「なぜ似ていると思ったの？」  
 C2 「どちらも単位を使うから。」  
 C3 「1cmを10個に分けたら（1つ分が）1mmになって、1Lも10個に分けたら（1つ分が）1dLになるところが似ていると思ったよ。」  
 C4 「そうしたら、（Lのますに）ぴったりじゃなくても（量を）数で表すことができたね。cmとmmもそうだったよ。」  
 C5 「本当だ。ここでも前に勉強したことが使えるね。」

概念的知識の理解

統合的理解

これは、2年「かさ」の学習で、Lよりも小さなかさの表し方について考えたときの子ども同士の会話です。「長さ」も「かさ」も「単位のいくつ分」で表すことから、同じように考えることができることに気づき、自身の学びを統合していくことで、いつでも使える知識（要素としての知識から概念としての知識）へと高めている姿です。このような知識を子どもたちが身につけるために、本校では下のような手立てを打ち、資質・能力ベースの授業への転換を図っています。

- ・ 学びを貫くキー概念を明確にする ・ 本単元につながる既習単元や見方・考え方をおさえる
- ・ 子どもが思わず見方・考え方を働かせるような学習課題を設定する
- ・ ゴールに向かう子どもの思考を読み取る ・ 説明できるように表現の仕方を身につけさせる

算数の授業を通し、「教科の見方・考え方を働かせて学び合う授業づくり」を目指した実践を紹介します。

## そうか、0だ！

1年「10より大きい数」でのある場面です。この単元のキー概念は「数の意味の拡張」です。数は個数や順番を表すものであることを学んできた子どもたちが、原点の0を知りそこからの長さも数であること、さらには見えない先にまで数が広がっていることを学ぶ単元です。



数直線と定規が似ていることに気づき、定規を見ながら数直線の目盛りに児童が数字を書いた。

T 「数は23までしかないの？」  
 C1 「その次は24だよ」  
 C2 「100とかあるよ。」

教師の働きかけにより、見えている数直線のその先にも数があることを知った。児童の中に、「数の連続性」という概念が生まれた。

数直線の目盛りとテープ図のますが合わないことに児童が気づき、そこで児童の中に「なぜ？」という疑問が生まれた。

C2 「テープと線の幅が違うのかなあ？」  
 （幅を確認する。同じだということがわかる。）  
 T 「よういどん、のときは1進んでいる？」  
 C2 「そういうことね。ゼロ！」

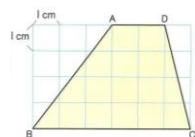
そろえるという見方を働かせている。

0が原点を表すことに気づく。

算数の世界から日常生活へとかえり、学びを生かす。

定規を見返し、定規にも0があることに気づいた。

子どもたちは数の持つ意味について自ら学びを深めていきました。数学的な見方を働かせて数を「見る」ことで、数の連続性やスタートのゼロといった、概念としての知識を獲得することができました。



## 8ってどこから出てきたの？

5年「台形の面積を求める公式を作ろう」では、複数の式を統合し、「統合式」を作り、その式の意味について理解を深めていくことを通して、公式を子どもが自ら導き出すことをねらった実践を行いました。

台形を変形させ、変形させた図形のものをもとに立式した。2つの式は「 $8 \times 4 \div 2$ 」になったが、1つ（右下の図）は「 $8 \times 2$ 」になった。

C1 「 $8 \times 2$ の2は、もともと4cmでそれが半分になるから $4 \div 2$ 。」

式の変形を行うことで、式の意味について考えられるようにした。

全ての式が1つの式に統合できた。そこで、台形の仮の公式を「(変形させた図形にとっての) 底辺×高さ÷2」とした。

T 「何か困っている？」

C2 「三角形と一緒にになってしまう。」

T 「8って何？」

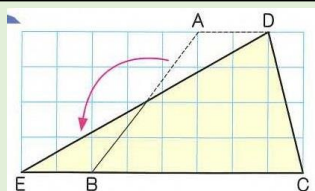
C3 「8ってどこから来たんだろう。」

T 「本当は(さっきの4みたいに) これだよって言うの、まだある？」

子どもたちは、周りの子と交流を始める。もとの台形の2cmと6cmに着目し始める。式の意味を、グループごと考え出す。

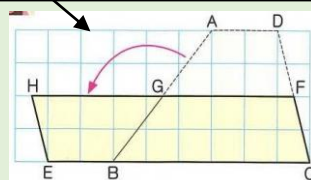
教師の投げかけにより、子どもたちに疑問が生まれる。

もとの台形の長さに着目することで、式の意味について考え始める。



C4 「最初は $BC = 6\text{cm}$ 。ADを移動して長くと、ADが2cmだから $6 + 2$ をして8になる。本当の式は $6 + 2$ で $(6 + 2) \times 4 \div 2$ 。」

もとの台形の数字を使い、できあがった式の意味を説明していくことで公式に近づいた。



C5 「最初の底辺BCが6cm。上のADが2cmなので、6に2cmプラスされたから $(6 + 2)$ 。 $(6 + 2) \times 4 \div 2$ 。」

T 「言葉にできる？」

C6 「(下の辺+上の辺) ×高さ÷2 →上底と下底という言葉を教え、公式を提示。

C7 「式の本当の意味を考えて、言葉をあてはめていくと、公式にできた。」

図形の構成要素に着目し、その構成要素に沿って立式することで、その式の「意味」を理解することができました。さらに、式からもう一度構成要素に戻ることで「公式化」できることを実感しました。答えを求めることを大切にするのではなく、その式の意味を理解することを大切にする授業を積み重ねることで、子どもたちは概念としての知識を身につけ、未知の問題にも主体的に取り組む力をつけていくことができます。

東山口小では、今後も授業を大切に、職員も児童も学ぶ楽しさを感じるような取組を続けていきます。



# 作ろう！3年2組食べ物図鑑

掛川市立西山口小学校 白松 麻友子

「先生、今日のめあてなに？」「先生より早くノートに書くぞ！」好奇心いっぱい3年生。どんな課題にも前向きに取り組みます。そこで、国語の説明的文章の教材を通して、「どうしてこうなるの？」「もっと調べてみたい。」「おもしろい。」といった驚きをもたせたいと考え、実践に取り組みました。内容だけでなく筆者の書き表し方の工夫を理解し、学習したことを「自分事」として捉え、説明する文章を書くことができるようにしたいと考えました。

## なぜこの順番で書いている？

「節分の前」「煮豆」「きなこ」「豆腐」「納豆、みそ、しょうゆ」「枝豆」「もやし」なぜこの順番に並んでいるのか。筆者の思いは何か。という課題に全員で取り組みました。相談は3人グループでガッチャン！が合い言葉。机を並べて話し合います。写真や本文から手がかりになることを探し、3人で答えを見つけました。

「作り方が簡単な順番だよ！」「形が残っている順番かな。」「お百姓さんが作る枝豆やもやしは、難しいから最後だよ。」「目に見えない小さな生物の力を借りているから後ろにあるんだよ。」いろいろな意見が飛び交いました。自分のグループの話し合い、全員での意見交流も楽しく進みました。



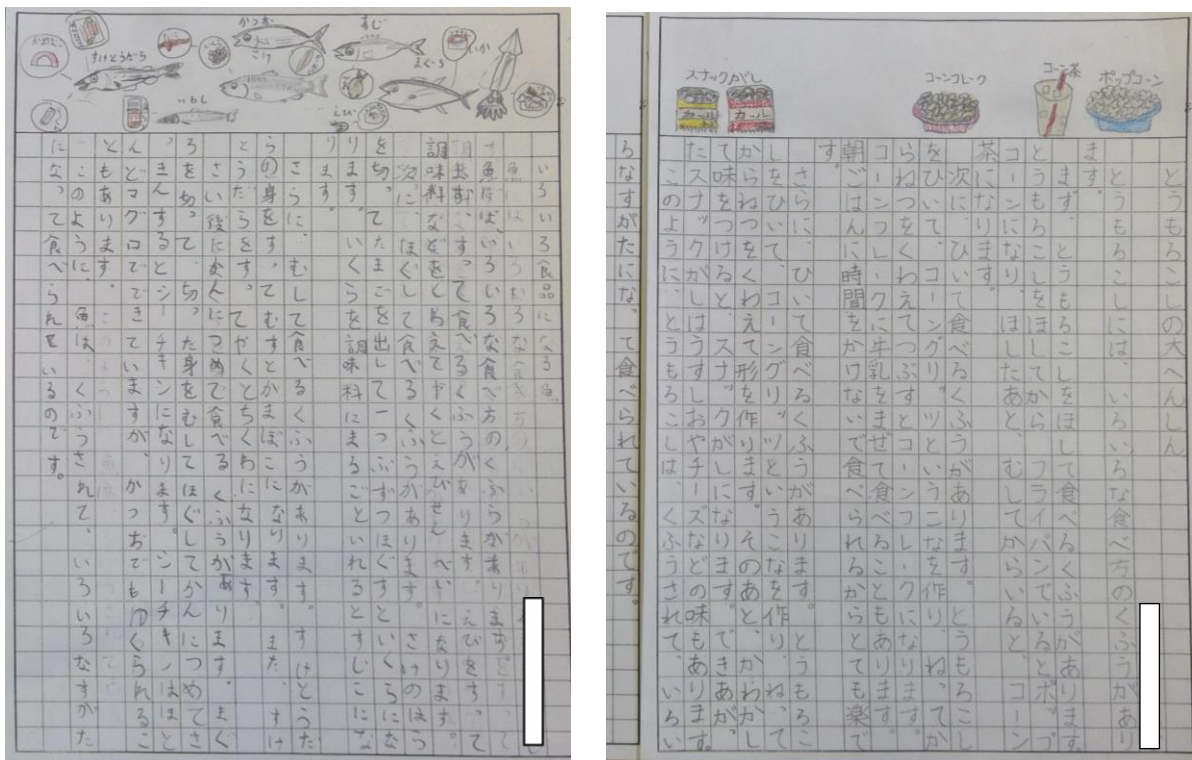
## どんな食べ物に姿を変えている？



「とうもろこし」「麦」「魚」「米」「いも」「牛乳」身近に口にしている食品の中から、子どもたちは興味のある食品の一つ選びました。教科書ではなく、図書室や図書館から借りた本や、インターネットを使ってどんな食品に変身しているか調べました。

「お米って、おせんべいになるんだ。」「すけとうだらってちくわになるんだって。」「とうもろこしに酵母菌を加えるとウィスキーになるんだって。」「作るの難しそう。」など、初めて知ることに関心と驚きの声を上げた子どもたちでした。

## 完成！ 3年2組食べ物図鑑



作り方や姿の変わり方など、作文メモにまとめた後、食べ物図鑑に清書しました。「同じ種類の食べ物なのにちがう食品になってる。」「お団子の作り方が分かった!」「牛乳は乳酸菌の力でヨーグルトになっているんだ。」など、友だちの食べ物図鑑を読んでたくさんの驚きを知ることができた子どもたちです。

## 「今日の給食は・・・」

この学習以来、毎日の給食では、必ず大豆談義が行われます。「今日の大豆は豆腐と油揚げだね。」「(献立表には)カボチャコロッケにも大豆って書いてあるよ。」「もやしもあるじゃん。」ほぼ毎日大豆食品が入っていることに気がついた子どもたちは以前よりも給食に興味をわき、完食する日がとても増えました。知識が生活に結びついた瞬間だと感じました。

# ピンチはチャンス「自らみんなと学ぶ」

掛川市立上内田小学校 松本 昌幸

## 1 この状況でも、自ら・みんなと学ぶ

上内田小の重点目標は、「自ら・みんなと学びつづける子」です。特に本年度は、「みんなと学ぶ授業づくり」に力を入れていくことを目的として、話し合いを充実させるために座席を工夫し、自分の思いを積極的に伝え合うような授業を目指しました。

しかし、新型コロナウイルス感染拡大防止のために、そのような活動が大幅に制限されることになりました。私たち上内田小職員は、この状況下で、児童にどうやって力をつけていくことができるか、議論を重ねました。児童の安全を第一にしながら、できることを考えた結果、「解決したい課題や問い」と「ICTを活用した授業」の2つを柱として取り組んでいくことにしました。

## 2 「解決したい課題」で自ら学ぶ

解決したい課題や問いを設定することで、自ら学ぶ姿勢を促すことは、そのまま継続していくことにしました。1年生の算数「引き算」の場面では、これまで繰り返しがりのない引き算を学習してきた児童に、「引き算のばらが引けない時は、どうしたらいいのか。」と問いました。13 - 9の計算方法について、「ばらの3からだ、9は引けないね。」「10のかたまりから9を取った方がいいね。」などつぶやきながら、ブロックを操作していました。前時との違いが明確になったことで、子どもたちの「解決したい!」という思いが強くなり、自ら学ぶ姿が見られました。さらに、もっと色々な問題を解いてみたいという思いをもち、意欲的に学習に取り組みました。



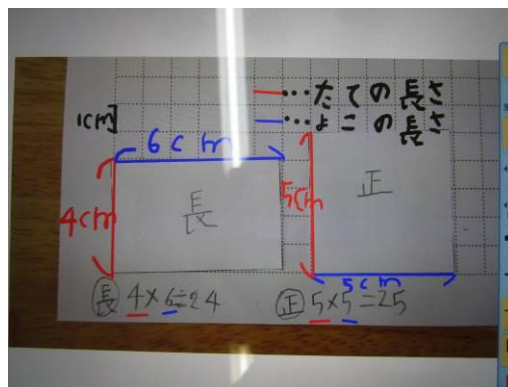
## 3 「みんなと学ぶ」はICTを活用して

顔を近づけながら伝え合う活動が大幅に制限される中で、どのようにして「みんなと学ぶ」授業をやっていくべきか。この課題を克服するために用いた手段が、I



CTの活用でした。

下の写真は、4年生の算数「面積」の場面です。「同じ個数のブロックを使って、より広い畑にするためには、どんな形にしたらいいのか。」という課題に対して、一人一人が自分の考えをタブレットに撮影しました。その画面を大型テレビに映して、説明をしました。タブレットに書き込みをして、説得力のある説明をしようとする姿も見られました。



5年生の算数「図形の角」の場面です。「どんな三角形でも3つの角の大きさの和は、 $180^\circ$ になるのではないか。」という予想を確かめるために、角の大きさを測ることができるアプリを用いて、一人一人が三角形をパソコン内に描きました。それぞれ違った三角形を持ち寄って、「どんな三角形でも」ということを確かめることができました。ICTを活用することで、「みんなと学ぶ」授業ができた場面でした。



※自分が調べた三角形

	1つ目	2つ目	3つ目
角A	$105.62^\circ$	$130.29^\circ$	
角B	$49.34^\circ$	$14.44^\circ$	
角C	$25.04^\circ$	$34.97^\circ$	
和	$180^\circ$	$180^\circ$	

#### 4 これからも試行錯誤を続けます

本年度は、今まで当たり前のようにやってきた活動が、大幅に制限されることになり、ピンチの連続だったように思います。しかし、上内田小の子どもたちは、このような状況でも、「学びたい!」という思いをもち、一生懸命学習に取り組みました。「ピンチをチャンスに」。本年度進化したICTの活用などを、来年度もさらに充実させていきながら、「自ら・みんなと学びつづける」授業をつくっていきたいと思います。

# 真の対話活動を目指して…

掛川市立城北小学校 由井原 佑

## 予期せぬスタート

令和2年度のスタートは、まさに予期せぬものとなりました。長い春休みが明け、「今年是对話を通して、学びを深めよう」と息込んでいた矢先の休校。休校が明けてからも、感染症予防として、向かい合っの対話や子ども同士での接触を極力減らしながらの教育活動に、悪戦苦闘しながら研修を進めていきました。対話やグループ活動が制限されたこともあり、「進んで関わる」ためのツールである「話合いのスキル」も、ファイルの奥へと追いやられてしまいました。

城北小 ペア・グループ 話合いスキル	
話すとき	やさしく話そう！
1・2年 レベル	① 聞いている人に、ゆっくりはっきり話す。 ② 理由をつけて話す。
3・4年 レベル	③ ノートや教科書を指さしながら話す。(相手が分かるようにノートに書かないとね！) ④ 相手が分かっているか、確認しながら話す。 (相手の表情を見る・「ここまで分かる？」「どこまで分かった？」「～と思ったんだけど、どう？」「～さん、分かった？」と聞く。)
5・6年 レベル	⑤ 友だちの質問に答える。 ⑥ 友だちの意見を聞いて、思ったことをつけて話す 例①…「つけたしで～」「そうそう、だから～だよね」「例えば、～だったら」 確認…「つまり、～ってこと？」 迷う…「でもさ～」「だってさ～」「～さんの考えはわかるんだけどさ」 ？…「ここまで分かったんだけど、その後がわからないな。」

そんなスタートを切った6年生国語科のものがたりをご紹介します。城北小学校の取り組みをお伝えします。

## 対話活動への挑戦！

「えっ?! 1分も話をするの?? 話すことないよ。」そんな声が聞こえてくる中で始まった対話活動。それもそのはず、授業中でのグループ活動はもちろんペア活動も制限され続けていたため、子どもたちには戸惑いが多くあったはずです。

まずは、感染症予防を優先させて、ペアで向かい合わせにならないように前を向いたまま。次は、顔を見合わせて、そしてグループで…。と段階的に対話活動を広げていきました。テーマは「今日の朝、何を食べてきたのか」「好きなテレビ番組(動画)について」など、話しやすいものから始めて、「最近、流行しているアニメについて、どう思うか。」といった、少し難しい内容へと深めていきました。グループでの対話では、さいころを使い、出た目のテーマに沿って話をする「さいころトーキング」も取り入れ、対話活動を楽しむ子どもたちの様子がありました。

「次は何をテーマにして話すの?」と聞いてくる子も出てきて、対話活動が順調に進んでいるように見られました。

しかし「何かがおかしい…」

子どもたちの対話をきちんと聞いてみると、一方的に自分の考えを伝え合うだけで満足したり、活発に話をしてはいるが、テーマから話が逸れてしまっても気付かずに続けてしまっていたりしたのです。これでは、対話活動ではなく、ただの「お話しタイム」になってしまっている。

「どうにかしなければ…」

## 「対話の達人」

「話をしているだけでは、対話活動ではありません。相手の考えを聞いて、それを自分の考えに取り入れたり、自分の考えをより強めたりするのが、対話活動です。」と、子どもに伝えたものの、

「どうしたら、それができるのか…」

そこで、ファイルの奥に追いやられていた

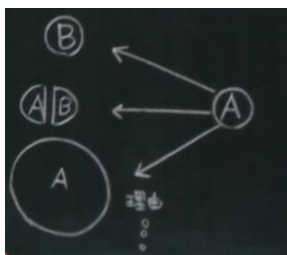
「話合いのスキル」をもとに子どもたちと対話活動がより上達させるためには、どんなことをしていけば良いのかを考えていき、右のような形でまとめていきました。

名付けて『対話の達人』

これをもとに対話活動を続けることで、最初は慣れない言い方だった言葉や反応が、自然と出てくるようになり、自分たちのものとなっていきました。

## 学びが深まる対話活動！

左の図のように、Aという考えが対話活動を通してBになったり、AとBが共存する形になったり、Aの考えの理由が増え強化されたりすることが「学びが深まった姿」として授業を進めていきました。



右の写真は、6年生が国語の授業で行った対話の様子です。



テーマは「これからの社会に生きていく上で大切なこと」とても難しい内容でしたが、ここまでに勉強した池上さんや鴻上さんなどの言葉を用いながら、それぞれの考えを伝え合いました。今回は、同じテーマで、違うメンバー同士での対話活動を、5分間ずつ行いました。対話を繰り返すことで、自分の考えが整理され、はっきりと考えが伝えられるようになったり、前のグループで出た意見を自分の考えに取り入れて伝えたりと、着実に学びを深めていきました。「5分間、子どもたちだけで、話が続けるのだろうか…」「3回も同じテーマで対話をして深まりがあるのか。」と、不安な部分もありましたが、授業を終えた子どもたちから「時間が足りなかった。もっと話をしたかった！」という“嬉しい声”が聞こえてきました。

今回のように、城北小学校では日々、児童の学びを深める方法を研究し、新たな挑戦をしてきました。その頑張りを支えてくれていたのは、このような子どもたちの“嬉しい声”だったように感じます。

<ul style="list-style-type: none"> <li>・話す人を見る</li> <li>・意見に反応(うなずく)</li> </ul> <p>「あゝ。」「へえゝ。」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分から意見を言う。</li> <li>・意見をつなげる</li> </ul> <p>「ゝさんと似ていて、…」 「ゝさんと違って、…」 「それって、…っていうことだよ。ってことは」</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・意見をもらって考えを広げる(司会)</li> </ul> <p>「私は、…と思っていたけど、ゝさんは、どう思う？」</p> <p>「ゝさんは、…と書いてたけど、それってどういうことかな？」</p>
---	--

# 主体的に学ぶ子の育成～「掛一ジャンプ」にチャレンジ！！～

掛川市立第一小学校 坂部 暢之

## 学年部の絆～授業はアイデア勝負～

「この課題だと難しすぎるから子ども達の学び合いが進まないよね？」「学び合いで全員が考えられるようにするためには、一度この文の意味を全体で押さえた方がいいと思う」

本校では、子ども達が主体的に学べる授業を行うために、授業の導入で扱う課題や学び合いの場面における具体的な手立てなどを、同じ学年の教員がアイデアを出し合って考えます。今年度は、学年会の時間だけでなく、研修の時間にも、同じ学年の教員で普段行う授業の教材研究する時間を設けました。同じ学年の教員で、時には異学年の教員ともアイデアを出し合うことで、一人では気付かなかった手立てや違った視点からの課題作りを行うことができます。本校では、教師一人の力量で授業作りを行って行くのではなく、学年部の絆を大切にすることで、教師中心の授業ではなく、子ども達が主役となって、主体的に取り組める授業を大切にしています。

## 面白そう！考えてみたい！！～子どもが夢中になれる「掛一ジャンプ」の創造～

「先生、もう考え始めてもいいですか？」「何この問題！どうやって考えればいいんだろう？」

たびたび子ども達から聞こえる声です。教師が指示を出す前から近くの友達と話し合う姿も見られます。魅力ある課題と向き合った時、子ども達が主体的に学びに向かう姿です。しかし、学力や生活経験の違う子ども達が集まる教室において、どの子にとっても魅力ある課題を設定することは難しいことです。

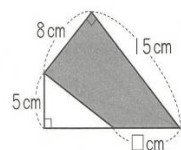
そこで本校では、一人で解けそうにない課題であっても、友達と相談したり、役割分担したりしながらなんとか解決することができる「掛一ジャンプ」と呼ばれる課題を設定して、子ども達がやる気を高め、夢中になって課題に取り組むことを目指しています。多様な考え方をを見つけ出すことや、簡単に解決せず試行錯誤を繰り返すこと、友達と学び合うことで解決することといった経験を増やし、どの子も一生懸命に課題に向かう姿が生まれています。

この「掛一ジャンプ」の課題を作り出すには、教科書には載っていない問題を考えることが多いので、「掛一ジャンプ」の創造には、時間と労力が掛かります。それでも、本校の教師は、子ども達の「面白そう！考えてみたい！」と思う姿に思いを馳せ、子ども達が夢中になれる課題になるように各教科の研修を深めています。

図形の面積～「掛一ジャンプ」にチャレンジ～  
名前( )

① 右の図で、かげをつけた部分の面積が80cm<sup>2</sup>のとき、□にあてはまる数を求めましょう。

(考え方)



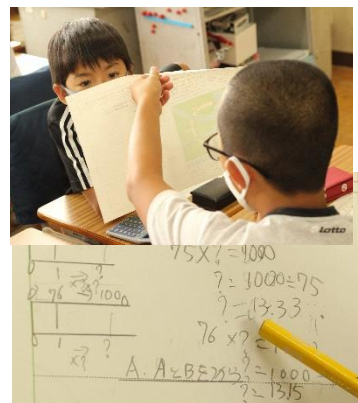
## 納得するまで追究～学び合いで表現力アップ～

「なんとなくは分かるんだけどな～・・・。」「頭の中では分かっているけど、説



明するのが難しい！」授業を行っているとき、よく耳にする言葉です。問題を読み、何となく式を立てる子ども、解き方は知っていて答えは求められるけれど、理由は分かっていない子ども、自分の中では分かっているけれど、友達には説明できない子どもなど、思考力や表現力に課題を抱える子どもは少なくありません。AIが進出してこれからの時代において、人がコンピュータに負けないためには、思考力や表現力を付けていくことが強く求められています。

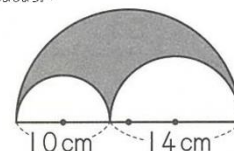
この課題を解決するために、授業の中で学び合いを大切にしている指導を行っています。単位数あたりの大きさを求める学習では、文章問題を読んだ時に、数直線や表を描いて問題場面を把握してから立式します。そして、その図や表を使いながら、立式の根拠を説明していくようにしました。最初は、図や表を描くことに抵抗を感じていた子ども達も次第に慣れていき、分からなくなった時には図や表を描く習慣が付いていきました。発表の仕方にも変化が見られ、聞かれたことに対する答え（主張）を先に言い、その後、図や表を根拠にしなが理由を説明できるようになっていきました。根拠や理由がなく、分かりにくい発表の時には、子ども達の中から、「理由がないよ。」「どうしてそうなったのか詳しく説明して。」などと、自分が納得いくまで聞く声が出てくるようになっていきました。



### 授業の土台は学び合い～授業を支える学校教育目標に向かって～

「この図形の円周ってどこになるの？」正多角形と円の学習での子どものつぶやきです。「この色が付いている部分の周りの長さのことだからこの部分になるよね。」ワークシートに色を付けながら説明していきます。「なるほど。じゃあ結局この大きな半円と小さな半円二つ分が円周になるのか。」疑問を投げ掛けた子どもはうれしそうな表情で問題に取り組み始めました。

正多角形と円～「掛ージャンプ」にチャレンジ～  
名前 ( )  
○次の図は、半円を組み合わせたものです。かけをつけた部分のまわりの長さを求めましょう。



本校では、自分の考えをつくる際、グループの形で向かい合い学び合いで学習を進めていきます。困ったときにはすぐに友達に相談できる環境をつくることで、自分の考えがもてず取り残されることを防ぐのです。自分だけが分かればそれでよいのではなく、みんなで分かるようになりたいという雰囲気があるからこそ、難しい「掛ージャンプ」にも全員が安心して取り組むことができるのです。この授業の後半では、疑問を投げかけた子どもが本当に理解できたのかを確かめるため、グループの友達が説明を聞く姿が見られました。子ども達同士も、答えを教えるのではなく、分かるとは何かを考えて授業をしています。本校では、「夢・元気・思いやり」のある子どもを育てています。授業の中でも子ども達の「みんなで」「一生懸命」「できるようになりたい」という思いがあふれる授業をこれからも創っていきます。



# 対話を通して思考を深める掛二っ子

掛川市立第二小学校 石黒 幸志

掛二小では、めあてを決め根気よく取り組む力や人を大切にして聴きつなげる力を付けるために、今年度から「めあてに向かって高めよう自分を みんなで」を重点目標に設定しました。掛二っ子は、授業や学校行事、委員会活動、あいさつ、掃除など、様々な場面で重点目標の実現に向けて取り組んでいます。ここでは、授業における取組を掛二っ子の姿とともに紹介します。

## 1 「解決したい」「考えてみたい」課題設定

「この問題を解決したい。」「どうやってやったらいいか考えてみたい。」と思えるような課題を設定することで、子どもたちの中に「自分の考えを伝えたい。」「友達の考えも知りたい。」という思いが膨らみ、自然と対話が始まる——そんな姿を目指し、解決したい課題や問いを設定しています。

### 【授業例①】

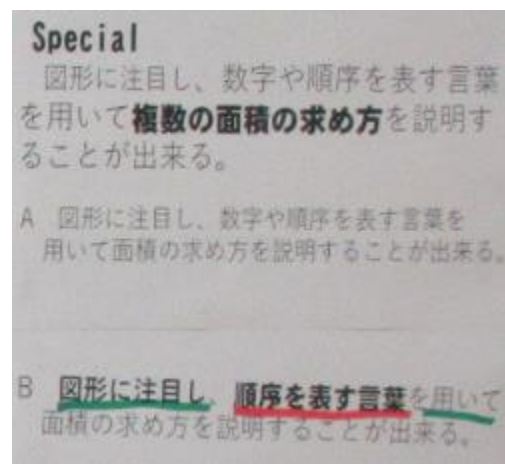
2年生の算数「かけ算(3)」の授業では、チョコレートの数を求める学習をしました。教師が示した実物のチョコレートに大興奮。学習意欲が高まります。一部分が欠けたチョコレートの並び方に注目した子どもは、(どうやって数えたらいいんだろう…)という表情。「1、



2、3…」教師が一つずつ数え始めると、「時間がかかって大変。」「かけ算を使った方が早いし、簡単だよ。」とつぶやく子どもたち。子ども同士の自然な対話が始まる中、学習したてのかけ算を使ってチョコレートの数を求める方法を考えることが子ども自身の問題となり、解決しようという意欲をもちました。

### 【授業例②】

6年生の算数「円の面積」の授業では、曲線のある図形の面積を求める方法を学習しました。教師が課題となる図形を提示し、「どうすれば色のついた部分の面積を求められるかな。」と課題を出しました。その際に、「スペシャル・A・B」に分けられた評価基準を子どもたちに提示。魅力のある課題に評価基準をプラスすることで、授業のねらいが明確になり、子どもた



ちはスムーズに活動に入ることができました。課題設定に見通しをもたせる工夫を添えることで、子どもたちの心の中に「解決できそうだ。」「考えてみよう。」という前向きな気持ちが生まれました。

## 2 ペア対話・全体対話で思考を深める

課題に対して個人で追究した後に、ペアでお互いの意見や疑問を伝え合う「ペア対話」を授業に取り入れてきました。ペア対話を行うことで、自分では気付けなかった考えを知ることができたり、自分の考えを相手に伝える中でよりよい表現に高まったり、疑問が解決したりすることがあります。

前述の2年生算数「かけ算(3)」の授業では、ペアでお互いの考えを伝え合い、より「は(早く)か(簡単)せ(正確)」な考えを図に表しました。一人では考えをもてなかった子どもがペアの考えを理解したり、自分の考えとは違うペアの考えを理解したりするなど、ペア対話によって思考の高まりが見られました。



また、ペア対話をすることで、よりよい考えはどちらかというものを自然に考え、洗練された考えが全体対話で発表されました。

全体対話では、ハンドサインを使って手を挙げる子どもたちの姿が見られました。ハンドサインは、

☞ (「意見があります」「質問があります」)

☜ (「つけたしの意見があります」)

☹ (「別の意見があります」)

を意味していて、発表した友達の意見と自分の意見を比べながら聴くことに繋がります。また、友達の発表に、「似ているなあ。」「同じ同じ。」と自然に反応している子どももいて、友達の発表を聴きながら自分の考えと比べ、対話を通して思考を深める子どもの姿が見られました。



## 3 根拠をもとに判断する子どもたちへ

課題に対して前向きに取り組み、対話を通して思考することを繰り返してきた掛二っ子。そこには、考えをもつ根拠があります。これまでの学習で習ったことや、本文・資料に書かれていること、時には友達の考えが根拠になることも。そのような根拠をもとに判断し、自分の考えに自信をもち、「みんなに伝えてみたい。」「みんなの意見も聴いてみたい。」と思わず前のめりになる子どもたちの姿を目指して、来年度は授業研究に励んでいきます。



## 「観」の転換 ～ちゅうおう型学びのスタイルを求めて～

掛川市立中央小学校 大越 才生

### 授業のゴールは子どもが作る ～授業「電鈴の仕組みを考えよう」～

<リリリリン、リリリリン>スイッチを押すと金属の棒が鐘をたたき、音が鳴ります。この装置の名は電鈴（でんれい）。現代ではあまり見かけなくなりましたが、昔は鉄道の発車ベル、電話機や火災報知器、学校の授業開始・終了を知らせる「音の合図」として広く用いられてきました。さて、この電鈴はどのような仕組みでできているのでしょうか。理科「電流が生み出す力」の単元終盤の授業です。「鉄の棒が鐘にぶつかるのは、磁力によるものだから…。」なかなか難しい課題です。「1時間考えたけど、自分の答えに自信がもてない…。でも、答えはまだ言わないで！次の時間も考えさせて！」答えが分からなくても、子どもたちの学ぶ意欲は十分です。授業の計画もありますので、残念ながら次の時間に正解を伝えます。隠していた箱をもちあげて、電鈴の仕組みを見せると…。「え？どうなってるの？ちょっと考えさせて！」大人が見てもすぐには理解できないかもしれません。「来年の夏休みは、この仕組みを使って目覚まし時計を作るよ。」少々工夫を凝らした電鈴の仕組みは、子どもたちの知的好奇心を刺激したようです。子どもたちがたどり着いたゴールから、新たな疑問、新たな目標がどんどん生まれます。子どもが主体的に学ぶ姿を追い求めて、中央小では「目標創出型授業」の研修が進んでいます。

### 主体性に重点をおいた授業形態の工夫 ～アウトプットを第一に～

子どもたちは1時間試行錯誤を続けます。中央小学校では、このような子ども主体の学びを推進しています。「深い学び」へ到達するためには、主体性が不可欠と考えるからです。授業前半、まずは自分の考えをノートに書き、次にグループの友達と話し合います。1人では解決できない問題も、友達と意見を交換すると新たな視点が加わり、解決に近づいていきます。自分1人ですぐに答えに辿り着くような問題でも、グループで話し合うと大変興味深い解答へと変化していきます。向き合っている課題に、友達が新たな側面から光を当ててくれるからです。「ベルの内側に強力磁石を入れればいいじゃん。」「それじゃ、連続して鳴る理由が説明できないでしょ。」言葉を通して友達と考えを共有することはとても大切なことなのです。



意見を交換するとき、どのような形態か、どのようなツールを介するのも重要です。自分の思いを十分に伝えられるためにも、集団の大きさは、3人から5人の小集団を基本とします。今回のように、はっきりと答えがわからない課題の時は、個人の考えを構成する活動になります。そんなときは自立式のホワイトボードが効果的です。集団の中でも、常に正対してボードに視線を集めることができます。1班1つ、全部で8つのホワイトボードが理科室に並びました。

グループの意見が十分に練られた次は、他のグループとのクロストークです。自分



たちの考えに自信がもてる時があれば、どれだけ話し合っても、納得がいく答えが出ない場合もあります。いずれにしても十分に話し合った後は新しい考えとの出会いに貪欲になり、クロストークの時間は、他のグループの考えを知ろうと懸命に考えを吸収しようとする姿が見られます。その後は再びもとのグループに戻り、先ほど得た有用な考えを持ち寄って最後の話し合いに入ります。そして、授業終了までに個人で考えをまとめて、課題は終了します。ノートには授業開始時の自分の考えと、授業終了時のものが並んでいます。交流を通して、自分の考えがどれだけ深まったのかをその都度確認し、1時間の成果に納得します。



自立式ホワイトボードに書き込みながら話し合う姿

### 「反転学習」で活動時間を確保 ～新たな学びのスタイルを求めて～

ある日の社会の授業です。情報通信技術の進歩で、私たちのくらしはどのような影響を受けるのかを考えました。授業開始と同時に、すぐに活動が始まります。「それでは、グループで話し合って考えをまとめましょう。」子どもたちは本時の課題についてすでに理解しています。なぜなら、自分の考えを家庭学習でまとめてから授業に参加しているからです。家庭学習では、教科書を読んで、資料をもとに自分の考えをノートに書きます。余力があれば資料集や地図帳にも目を通し、10分から20分程度で書き終えます。従来、授業で知識や技能を獲得し、それを家庭学習や日常生活で生かす方法がなされてきましたが、それを「反転」し、家庭学習で知識や技能を得た後に、授業で活用します。このような学習法を「反転学習」といいます。メリットは多く、知識や技能の獲得を自分のペースで繰り返し行えること、授業でアウトプットを主に行うことで知識や技能が定着することなどが挙げられます。デメリットとしては、ある程度の学習意欲が求められること、低学年では保護者のサポートが必要なことなどがあります。授業を終えた子どもたちのノートを見ると、授業前の自分の考えと、友達と意見を交換した後の、深化、変容した自分の考えが並びます。「ICTの進歩について、〇〇さんは良いことの方が多いと話していたけど、僕はデメリットが心配です。AIなどの人工知能は、あまり使いすぎず、人間と協力、共存することが一番大切だと思いました。」授業開始と同時に活動に入ることで、授業のリズムが生まれ、休み時間と授業時間のメリハリが付き、子どもたちの思考も活性化していると感じています。このような授業を続けることで友達の考えに触れる機会が多くなり、物事を多角的に捉え、視野が広がることも期待しています。慣れるまでに練習が必要ですが、労力に比べ余りあるメリットが得られると感じています。

ICT教育の飛躍的な進歩の中、文部科学省のGIGAスクール構想実現に向けた施策が大きな話題となっています。国家予算に加えて市が予算を充てることで、掛川市では「一人一台iPad」の実現が目前に迫っています。今年度、中央小学校では「教科担任制・午前中5時間日課の導入」を軸に、抜本的な教育課程の改変を行ってきました。新学習指導要領のスタートとともに新しい学びのスタイルが求められる今こそ、授業、家庭学習共に、従来の「あたりまえ」を見直す時ではないでしょうか。新しい学習「観」への転換に向け、中央小の研修は進み続けます。

# 学校力を尽くしてコロナに立ち向かった授業づくり

掛川市立曾我小学校 雲母 政敏

## 先生たちの学び合い

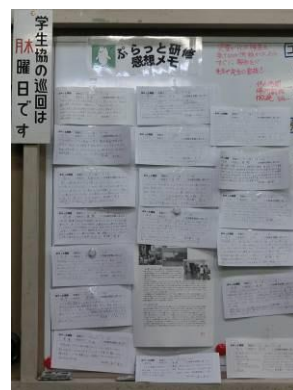
授業再開からおよそ1か月。顔を合わせて学ぶ楽しさや大切さを、子どもも職員も改めて実感した時間でもありました。子どもたちの「分かった」「できた」のためには、どのようなことが必要なのか、授業再開後の実践を持ち寄り、話し合う勉強会を行いました。「やはり、この授業でどんな力を付けたいのか、ということが大事だね。」「計算の仕方など一人で説明できる場面でも、あえて、書く人、操作する人、説明する人の3人で行うことで理解が深まると感じた。」など、様々な工夫をしてきたからこそその考えがたくさん出されました。グループで話し合ったことは全体の場で伝え合い、子どもたちと同じような形で、職員も勉強をしました。様々な工夫を研修主任が15か条に整理し、今後の授業づくりに生かす手掛かりとして共有しました。



## 曾我小の自慢「先生」で挑み、支え合う

「自分の生活と関わった課題だと、子どもたちは真剣になるよね。」「同じ内容を問うのでも、発問の仕方を変えた方が子どもに伝わりやすいかもしれないよ。」指導案作成を全員で行ったときの様子です。各自の指導案について相談し合い、ベテランの教師が若い教師にアドバイスする中で、学習課題、学習問題、まとめまでの流れやタイムマネジメントを全員が意識することができました。

また、「一人一研究授業」に代わり、「ぷらっと研修週間」を定期的に設定し、短時間でも互いの授業を参観するようにしました。「見せてもらっていいですか?」と、意欲的に授業参観に行く教師の姿が毎日見られ、職員室の掲示板には感想箋が増えていきました。放課後の職員室には、参観した授業について更に語り合う姿や、感想箋を読んで授業を反すうする姿が見られました。曾我小自慢の機動力にあふれる研修風景です。そして、学力保障、授業力向上のために真摯に学ぶ教師の姿こそが、曾我小の学校力であると考えます。



- ①考えを広げる、つなげる、高める伝え合い
- ②ゴールを意識した授業
- ③ICTの効果的な活用

「ぷらっと研修週間」を通して、先の15か条をさらに絞り込み、この3点を共通実践項目として取り組むことにしました。

## 「わかった」「できた」が見える授業

「1mあたり何秒」か「1秒あたり何m」かのどちらかで比べればよいと分かることが、本時のゴールだね。「速さを求める練習問題は、思い切ってやめて、どう比べるかに焦点化してみたらどうだろうか。」コロナ下ではありますが、教師全員で同じ授業を見て学び合う場を設定することにしました。そのために、皆で指導案を検討し、子どもの姿を思い描いて、授業を構想しました。

〔学校までの道のりと時間〕

	道のり (m)	時間 (分)
こうじ	720	12
みゆき	660	12
ゆうご	660	10



A 「ゆうごさんが1分でどこまで行けるかを

求めて、こうじさんも1分でどこまで行けるのか求めて比べればいい。」

皆「1分間あたり。」

B (ノートをスクリーンに映し) 「道のり÷時間」で計算すればいい。」

C 「僕も同じ式でやって、出てきた60が何の数か分からなかったんだけど。」

D 「こうじさんが1分間あたり60m進んだ道のりということじゃないかな。」

E 「時間と道のりが両方違うと比べられないと思ったけれど、どちらかが同じになると比べられる。」

F 「比べ方は一つではなく、1m歩くのにかかった時間もあるんじゃないかな。」

G 「今度は逆に、「時間÷道のり」で出ると思う。」

事前研修で思い描いたように、子どもたちは、自分の考えを伝え合いながら、速さの2つの求め方を追究していきました。

「今日、一番楽しかったのは理科の授業です。」子どもたちの日記には、そんな言葉があふれます。思うように実験や観察ができないときだからこそ、教師が提示する資料をテレビに映し、同じものを皆で見て話し合うことを通して、理解を深めることも行いました。「分かった」「できた」につながる授業づくりのためにも三密を避けるためにも、ICTの活用がぐっと進んだ今年度です。曾我小自慢の学校力を生かし、今日も授業づくりに邁進します。





# どの子ども学び続ける授業の創造

掛川市立桜木小学校 平野 良直

## 「自分ごと」の学びになるために

学びの主役は子どもたちです。子どもたちが、「何でだろう?」「〇〇かもしれないぞ!」「分かってきた!」と真剣に悩んだり、目を輝かせたりする授業を桜木小ではめざしています。このような姿が見られるとき、子どもたちは学びを「自分ごと」として捉え、主体的に学習に取り組むのだと思います。



## 「自分の考えを伝えたい!」を育てる

ブロックを操作しながら、自分の考えを発表しています。実は、この写真、7月の1年生です。1年間で一番成長するのが1年生ですが、入学して4か月でここまで成長します。桜木小では、自分の考えたことを自分の言葉で伝えられる子を日々の授業の中で育てています。



## 「一緒に考えたい!」を育てる



3年生の小数のたし算とひき算の授業です。数時間の授業で小数の筆算ができるようになった子どもたち。今日の問題は、「 $4 - 1.8$ 」です。前回までの学びを生かしながら一人一人筆算を始めます。しかし、よく見ると、答えが2つに分かれています。「子どもたちの問いが生まれる」瞬間です。

C1「答えは、3.8でしょ！簡単簡単！」

C2「ええ？2.2でしょ！だって、・・・」

教室がざわざわし始めます。3.8と答えを出した子どもからすれば、2.2という答えは疑問ですし、もちろん逆もそうです。

**答えは、3.8なのか？2.2なのか？**

ここで初めて話し合いをする必然性が生まれます。友達を納得させるために、自分の考えを説明していきます。このような対話学習の中で、子どもたちは教科の知識だけでなく、人と協働して活動していくことを学びます。ただ、先生にやり方を教えてもらうだけの授業



では、主体性や協調性は育ちません。桜木小では、人と関わりながらよりよいものを創造できる子を日々の授業の中で育てています。

## 「新しい時代に対応できる力」を育てる

ICT技術がめざましい進化を遂げています。多くの人がスマートフォンを持ち、いつでもどこでも必要な情報を手に入れられる時代になりました。情報を獲得する選択肢にICT機器が加わり、子どもたちの学び方も変化していきます。掛川市も、近々、1人1台タブレットが入るようです。桜木小でも、タブレットを活用した授業が提案され、新しい時代の学び方が見えてきました。

**プログラミングソフトを活用して、正六角形を描こう。**

5年生が、正多角形の作図をプログラミングソフトを活用して行いました。

「すべての辺の長さが同じ」「すべての角度が同じ」という正多角形の性質と、「同じ動作を繰り返し行う指示」というプログラミングの特性の一つを生かしながら、子どもたちは、正六角形の作図を進めていきました。子どもたちが生きて



いく新しい時代は、ICTを正しく、うまく使いこなせる力が必要になります。

「ICTの導入で子どもたちの学びがどう変わるのか？」「ICTにどんな可能性があるのか？」来年度の桜木小では、ICT活用が大きなテーマの一つになりそうです。

# 主体的に学ぶ子どもたち

掛川市立和田岡小学校 山口 真弓

## 和田岡小のめざす学び

本校では、研修テーマを「主体的に学ぶ児童の育成」とし、「あれ?」「どうして?」と子どもの疑問が生まれるような導入をし、子どもの「考えてみたい」「解決したい」気持ちを高める学習問題を設定することで、学ぶ意欲が継続するのではないかと考え、研究の柱を「児童の思考にそった学習問題の設定」として、一年間取り組んできました。

一年生算数科の授業で見られた児童のものがたりを紹介しながら、本校の取組をお伝えします。

## 「あれ?」「どっちだろう?」からのスタート

繰り上がりのあるたしざんや繰り下がりのあるひきざんを一通り学んできた子どもたち。ブロックや絵を使って加法場面か減法場面か考え、説明する活動を通して、文章問題の意味を正しく捉えて立式することをねらった授業を行いました。つまり、「合わせて」「食べました」「のこりは」などのキーワードだけでは解決しない問題の立式です。今までの学習で、キーワードをヒントにしながら、ブロック操作したり簡単な絵をかいたりしながら立式してきました。

「クッキーを、男の子は9個食べました。女の子は6個食べました。」ここまで話すと「食べましただから、ひきざんだ!」と反応する子どもたち。予想通りです。「まだ続きがあります。合わせて何個食べたのでしょうか。」と問うと、「食べましただと減るからひきざんかな」「合わせてって書いてあるからたしざんだと思う」とキーワードから演算決定しようとするが、「えっ、どっちだろう?」と頭の中ははてながいっぱい。そこで「たしざんかな。ひきざんかな。」という学習問題を立てました。

視覚的、効果的に子どもたちに学習課題を伝え、短時間で学習問題に入ることも、本校の研修で大事にしていることです。

## 試行錯誤する子どもたち

自分の考えをつくったあと、たしざんの子は赤帽子、ひきざんの子は白帽子をかぶり、ブロックやノートを見せながら違う色の帽子の友達と考えを伝え合いました。始めは白帽子が多かったけれど、だんだん赤帽子が増えたと思ったら、また白

帽子に・・・

今回は、実物投影機でブロック操作をテレビに映しながら説明させることを試みました。自分が使っているブロックを使って説明した方が、説明する人も聞いている人もわかりやすいと考えたからです。一生懸命説明するけれど、言葉足らずだったり、ブロック操作と言葉が合っていなかったりで、なかなかうまく伝わりません。語彙を増やし、説明する力を伸ばしていくことも、これからの授業で大切にしなければならぬと痛感しました。

ブロックを動かしながら、「合わせてと書いてあるからたしざんです。」と発言する子もいましたが、ひきざん派を説得することは難しいようでした。授業の終わり頃、「やっぱり食べたからひきざんだよ。」という声が聞こえたので、「じゃあ、 $9 - 6 = 3$  二人合わせて3個食べたということですね。」と聞くと、「・・・」反応がありません。何かおかしい、でもよくわからない。1時間で授業をまとめることも大切ですが、今回はあえてまとめませんでした。

当日の授業で、「食べたから絶対ひきざん！」と少し意地になっているようにも見たAくんでしたが、翌日の授業で「二人のおなかにあるクッキーを合わせればいいんじゃないの？」と発言しました。時間はかかりましたが、Aくんが問題文の場面状況を理解し、立式できた瞬間でした。

## より主体的な学びをめざして

本年度、失敗を恐れず「一歩ふみ出す子」をめざし、様々な教育活動を進めてきました。研修で授業の導入に力を入れてきたことで、学習問題に対して、既習事項を使いながら自分なりの方法で試行錯誤し、なんとか解決したいという意欲をもって学習に取り組む姿が、どの学年でも見られるようになってきました。しかし、意欲が高まったものの、考えづくりにつまずいたり、友達に上手に説明ができなかったりして、学習が思うように進まないこともありました。

子どもたちが、これから生きていく中で、未知のものに対してでも試行錯誤しながら学習を進めていくことができるように、本年度の成果をつなぎ、来年度は、一人一台のタブレットを効果的に活用しながら学びを深めていけるような授業改善をめざしたいです。





# 子どもが学びに向かう力を育む授業

## ～ 「まとめ」と「活用」を視点として～

掛川市立原谷小学校 兼子 知也

### 子どもたちが安全で安心して学べる環境を作る

4月、新型コロナウイルスの影響で、全国一斉休校となりました。授業の開始が遅れ、授業時間が確保できず、子どもたちの学びの保障がさげられました。また、感染症対策を行いながら、どんな授業を行えばいいのか模索することが求められました。休校期間中、原谷小学校では、子どもたちが学校再開後、安心して学ぶことができるように、子どもたちが集中して学びに向かうことができる環境を作り、子どもが学びに向かう力を育む授業を目指しました。

#### 〈感染症対策の共通理解〉

学校開始に向け、1日の流れや授業の中でどのようなことに気を付けるべきか共通理解を図りました。音楽の授業や給食の時間のことはもちろん、登校後の過ごし方や昼休み後の子どもたちの動きについても話し合いました。

#### 〈ICT環境整備〉

大型掲示装置を使用することで、子どもたちと同じ教材やデジタル教科書を投影することで、子どもたちの注目を集めたり、児童と同じ目線で解いたり、結果を見せたりが可能となります。これをどの教室でも同じように活用していけるように各クラスへ大型掲示装置の設置を進め、子どもたちに分かりやすく示すことができるようにしました。



### 「すすんでやってみよう！」を目指す

原谷小学校では、『すすんでやってみよう！』を重点目標として行い、学習の中でも子どもたちが自ら学ぼうという姿を目指してきました。子どもたちがすすんで学びたいと思えるために、「学習したことを、活用できる場の設定」「学んだことを、自分の言葉で振り返る活動」を研修のテーマとして行ってきました。教材と自分の考えを結び付ける姿、友達の考えを参考にして考える姿、自分の考えと友達の考えを比べて考える姿、友達と友達の考えを類型化して言いかえる姿、情報を共有しながら解決に向かう姿、課題に立ち返り本時の学びを振り返る姿、身に付いたことを他者に伝える姿、課題解決に向かって見通しをもち計画、手順を調整していく姿を目指すことで『すすんでやってみよう！』という気持ちにつながるかと考え、原谷小の授業は進められています。





## 自分の言葉でふりかえる

「何を書けばいいかわからない。」いきなり自分の言葉で学習を振り返ろうでは、当然こうなってしまう。この1時間で何を学んだのか言葉にすることは、自分の考えがどう変わったか、自分がどんなことに気付いたのかを客観的に判断できないとわかりません。低学年の子にもこれができるにはどうしたらいいのか。

「うちのクラスはこうやってまとめているよ。」「こうしたらうまくいったよ。」などと教員間で、様々なアイデアを出し合い取り組んできました。

### 【記号やイラストと一緒に】

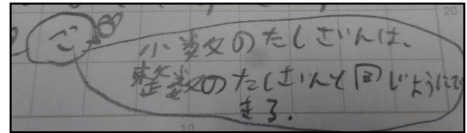
振り返りの際、言葉だけでなく、今の自分の気持ちをニコちゃんマーク等のイラストと一緒に表現させました。子どもたちは学習を振り返り、

「今日はこんなことができるようになった。」という自信が持て、自己肯定感の上昇にもつながっています。

### 【振り返りの視点を作る】

国語では「音読をして、どんなことに気を付けたか書くよ。相手の音読の良さを見つけてあげてもいいね。」など、教師のちょっとした声掛けや今日のめあてを振り返らせることで「あっ、そうか。」という気付きの声があがりました。

対話活動の中では、『いいね』『しつもん』『同じ』などのカードを作って、授業の中で自分がどのカードが使えたのかという視点で振り返りを行ったクラスもあります。カードが使えたかどうかという視点で考えることで低学年でも「できた・わかった」がはっきりとわかりました。



## 学びを活かす

学んだことを活かすために、自分たちが学んだことをクラスの友達や学校の人々へ紹介する場を設定しています。調べたことや体験・学習を通して感じたことを、新聞でまとめたり、プレゼン形式でまと

めたり、子どもの実態にあった方法でまとめています。友達と見せ合うことで、写真を入れたほうがいいのか、自分でイラストを書いたほうがいいのか、相手にわかりやすく伝えるという意識

をもって活動しました。6先生では、国語で学習した鑑賞文の書き方を活用し、図工で友達の作品に感想を書いたり、算数で学習した平均を用いておおよその数を予想したり、他教科とのつながりを生かした実践も見られました。

これからもこうした授業を通して、子どもたちの「できた・わかった」という思いを膨らませ、『すすんでやってみよう!』という子どもたちを原谷小では育てていきます。





## 思考を広げる子どもたちに！

しばらくすると、子どもたちに変化が見られてきました。つなぎ言葉をどんどん使い、思考を広げる姿が見られてきたのです。3年生の「あまりのあるわり算」の授業で見てみましょう。

⋮  
A：あまりが1, 2, 3。1, 2, 3。 becoming.

B：ってことは、このあとも1, 2, 3、わりきれ。1, 2, 3, わりきれ。ってこと？

全員：あー。なりそう。やってみたい！

\*全員で試す。

全員：なった、なった！

教師：ってことは.....

C：ってことは、5のだんや6のだんもできるのかな？

教師：5のだん、6のだんって？

D：だから、わる数が5になるってことじゃない？

E：できそう！5なら（あまりが）1, 2, 3, 4ってなるんじゃない？

\*全員で試す

F：わかった！あまりの数は、わる数を超えない。例えば、こっち（÷4の方を示し）は、あまりの数が1, 2, 3って続いて、わる数の4を超えたりしてない。

G：わる数が4だったら、1, 2, 3で1個下。わる数が5だったら、4までしかいかないってこと。

教師：なるほど。つまり.....

H：つまり、あまりはわる数より1こ下までってことだよ。

⋮



「つなぎ言葉や反応が多くなると、なんか楽しい！」

「『例えば』で説明するのが上手いのはAさんなんだよな。」

「『つまり』を使ってまとめられる子がでてきた。でも、もっと増やしたいな。」

子どもたちが最近このようなことを言うようになりました。つなぎ言葉を使うことへの意識が高まってきました。また、つなぎ言葉を使ってみんなで思考を広げていく楽しさも感じているようです。

算数アイテムに続き、また1つ「つなぎ言葉」という武器を手に「思考を広げる力」を身に付けてきた原田っ子。これからも、原田小一丸となって原田っ子のさらなるレベルアップを目指していきます。

## 共によりよく生きていく力を育てる道徳授業

掛川市立西郷小学校 鷲山 智久

令和元・2年度で、掛川市教育委員会より「特別の教科 道徳」の研究校の指定を受けました。西郷小学校では「共によりよく生きようとする子の育成～他者と関わり、自己を見つめ直す授業を通して～」を研修テーマとし、授業の中で友達と関わりを持ち、自分自身と向き合うことを通して、自分自身の生き方を考え、判断し、他者と共によりよく生きていく力を育てる授業づくりの研究を進めてきました。

では、どのような授業づくりをしていけば、子どもたちに共によりよく生きていく力がついていくのでしょうか。子どもたちの学びの姿を思い浮かべながら協議を重ね、研究に励んでいきました。子どもたちが自分自身と対話し、成長していく姿をお伝えします。



### まずは自分の考えを持つ

どの教科の授業でも、その1時間に考えたり、学んだりすることが曖昧になると子どもたちは口をそろえて「分からない。」「難しい。」「と言います。そうならないために、今日1時間で何を考えるのか、ねらいをはっきりとさせました。その上で、子どもたちがねらいと向き合い、多様な思いをかき立て、思考を刺激するような質問をぶつけるようにしました。「自分だったら、こうするよ。」「主人公の思いは、きっとこうだったんだよ。」というように、考えることがはっきりと分かるからこそ、自分の考えをしっかりと持ち、自然と子どもたちの心に火がついていきました。



### 友達との対話が心を刺激する

西郷小では、「心情円」という心の割合を表す円グラフをどの子どもも持っています。心情円を頼りに、自分の思いを言葉にし、その割合の理由を伝え合いました。普段、発表が苦手な子どもも、心情円を寄りどころにし、微妙な思いを自分の言葉で伝え合うことができました。友達との心





情円のずれから、対話を深めていき、「何でそう思うの。私とはちょっと違うよ。」「その気持ちも何かわかるな。」と、友達の思いや考え方の違いが、一人一人の心を刺激し、新しい考え方を生み出し、より深い考えを導き出していきました。子ども同士の対話や意見交流の中から、子どもたち一人一人が多くのことへ気づき、深い学びをしていく姿が見られました。

## 自分自身と対話し、自分自身と向き合う

1時間の中で、たくさんの発表や友達との対話で多様な思いを抱いた子どもたち。そこで大切にしてきたのが、「振り返り」の時間です。今までの自分を振り返り、弱い自分や目指すべき自分。自分自身と対話する時間が、子どもたちの心を育てていきます。こうするべきという「教師の答え」ではなく、自分自身と向き合うことで導き出した「自分なりの答え」にたどり着くようになってきました。教師は、一人一人の思いや答えを丁寧



に見取って、大切にしてきました。

詩の盗作をした自分について考える6年生の授業では、「友達や先生になんて言われるか分からなくて嫌で、心に傷がつくのがつらい。」と考え『正直に言えない。』と考えていたAさん。友達の発表を聞いたり友達と対話を繰り返したりすることで、「黙っていて一生心の中でもやもやを持ち続ける方が嫌だし、正直に言うことはとても大切なことだ。」と、『正直に言おう。』と考えが変わりました。

1時間の中で、友達の多様な考え方に触れ、自分自身と向き合う中で、考えを深めていった心の変化の様子が、ワークシートからよく見て取れました。

もし自分が和枝さんの立場だったら本当のことを言えますか。

6年  
(理由を書こう)

自分の心開門

みんなの話を聞いた後の心開門

① 自分のことを考えることができた。 ③ 3 2 1

② 友だちの話を聞いて、新しい気づきがあった。 ④ 3 2 1

③ これからの生活について考えることができた。 ② 3 2 1

自分の心開門

みんなの話を聞いた後の心開門

① 自分たちの生活について考えることができた。 ② 3 2 1

② 友だちの話を聞いて、新しい気づきがあった。 ④ 3 2 1

③ これからの生活について考えることができた。 ③ 3 2 1

④ 自分たちの生活について考えることができた。 ② 3 2 1

① 友だちの話を聞いて、新しい気づきがあった。 ④ 3 2 1

③ これからの生活について考えることができた。 ③ 3 2 1

## 道徳の学びを他の授業へ繋ぐ

「共によりよく生きようとする子」を育てる道徳の授業づくりを進めていくことで、子どもたちは友達の良さを感じたり、本音で語ったり、関わり合ったりしながら、考えを深めていくことができるようになってきました。また、一人一人が思いや考えをしっかりと持ち、違いを受け止め、多様性を認められるようになってきました。この力は、道徳の授業だけでなく、全ての授業に繋がっていくものです。

様々な場面で子どもたちの良さを伸ばしていけるように、子どもたちの思いや声をよく聴き、子どもたち同士が繋がる授業づくりを進めていきたいと思ひます。

# 「～たい」にあふれる、かがやく子

掛川市立倉真小学校 池田 勇太

自然に溢れ、地域に愛されている倉真小学校。人数は少ないですが、いつも子どもたちの笑い声が学校中に響いています。「知りたい」「やってみたい」「解決したい」「話したい」「聞きたい」「教えたい」など、今年度も、かがやく姿が授業の中でたくさん見られました。

## 1年生 「ひろがれ えがお～家族ニコニコ大作戦～」

教師：「もっと家族のニコニコをもっと増やすためにできることは何だろう。」

児童：「何かできそうなことか…そうだ。あれやろう！」

家族のニコニコを増やすために、自分にはどんなお手伝いができそうかを考え、次々と短冊に書いていました。子どもたちの「家族に喜んでほしい。」という温かい思いが伝わってきました。「家族にとっても児童にとっても笑顔が増える学習にしたい。」という教師の思いからスタートした授業でした。夢中になって学習する姿に1年生の成長を感じました。

## 2年生 「お手紙～想像したことを音読劇で表そう～」

教師：「手紙の内容を教えてもらったがまくんはどんな気持ちだったでしょう。」

児童：「君が書いた手紙なんだ。うれしいな。早く手紙がこないかなあ。」

自作の台詞をワークシートに書き込む学習をすることで、登場人物の気持ちを想像することができました。音読劇の練習では、「がまくんやる？かえるくんやる？」「すらすら言えてスピードもちょうどよかったよ。」と、ペアでの活動は慣れたもの。お互いのよさを認めながら協力して学習することができました。



## 3年生 「ちいちゃんのかげおくり～感想から学習問題を作ろう～」

教師：「かげおくりで家族と会えたちいちゃんは幸せでしょうか。」

児童：「幸せだと思う。ずっとみんなに会いたかったからちいちゃんは、幸せだよ。」

「幸せではないよ。会えたかもしれないけれど、死んでしまうんだよ。かわいそう。」

「ちいちゃんのかげおくり」では、初めての感想や疑問をノートにいっぱい書きました。その感想や疑問をもとにした学習問題を設定し、授業が展開しました。子どもたちが考えた問いなので、主体的に考える姿が見られました。

#### 4年生 「一つの花ボックス～お父さんの心の声を想像して～」

教師：「偶然見つけた花なのに、どうして大事にしてほしいって思ったのだろう。」

児童：「もう会えなくなると思っているから、お父さんを思い出してほしいんだよ。」

「コスモスの花に、すてきな大人になるんだよって願いをこめたんだよ。」

「一つの花」の学習では、家族を残し、出征するお父さんの気持ちを想像し、「一つの花ボックス」にまとめました。ボックスが完成すると、「Aさんもそう思ったんだね。」「Bさんが想像したことはわたしと違った。」などと見せ合っていました。自分の考えを伝えたい、友だちの考えを知りたいという気持ちが表れていました。



#### 5年生 「大造じいさんとガン～まるごと読み取る～」

教師：「残雪へのイメージが変わったきっかけは何だろう。」

児童：「残雪が仲間が殺されそうになった時に命がけで助けた姿を見たことだと思う。」

「ハヤブサとの戦いを見てライバルだと認めるようになった。」

大造じいさんの1場面と4場面の気持ちの違いに気付かせ、残雪への思いの変化を読み取らせます。場面ごとの読みではなく、文章をまるごと読んでいく授業展開へのチャレンジでした。学習のまとめを休み時間になってもびっしりとノートに書く児童がいました。納得するまで考え、やり抜こうとする姿でした。

#### 6年生 「コロナ差別～自分だったらどうする～」

教師：「学校内に発熱者が出たら、自分だったらどうするだろう。」

児童：「本当か分からないけど、噂しちゃうかも。」

「大丈夫って声を掛けると思うけど……」

コロナ差別の動画や場面の例を見て、「精神的に追い詰められてかわいそう。」「コロナじゃないかもしれないのに決めつけるのはひどい。」という感想。しかし、教師が「その場に自分もいたらどうかな。」と問うと、「自分も噂を広げちゃうかもしれない。」と話し出しました。この心をもちながらも、自分事として今後のなりたい自分について考え始めました。自分自身を見つめ、真剣に考えたからこそ気が付いた心です。そして、安心感のある教室だからこそ、本音を出し合うことができます。



## 友達との対話を通して、思考する

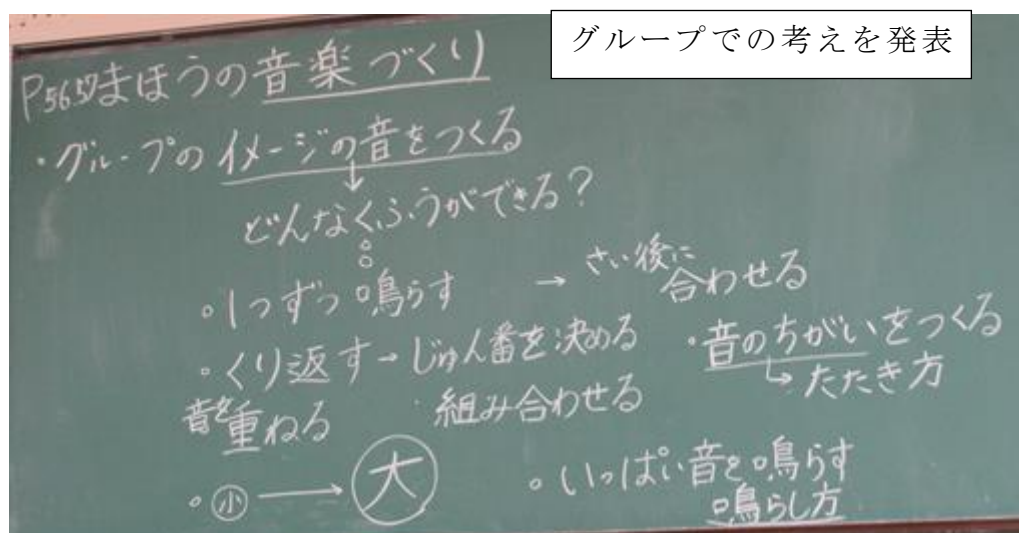
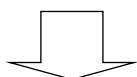
掛川市立土方小学校 渡辺 智美

3年生音楽科「いろいろな音のひびきをかんとろう」の授業です。3年生は、音楽の授業が大好きです。授業が始まると、明るい歌声が響いてきます。今日の授業のめあては、「グループでまほうの音楽に近付けよう」です。グループでどんな音楽ができあがるのでしょうか。

### どんな工夫ができるかな

3人グループのAさん（木琴）、Bさん（すず）、Cさん（シンバル）で「まほうの音楽」とはどんな音かイメージをもちました。まずは音を出さないで考え、まなボード（ホワイトボード）に記録します。

- A 「重ねるけど、ずらすのがいい。」  
B 「どんどん楽器が増えてく？」  
A 「音が重なったら、はじめの楽器はやめていく。」  
C 「えっ、重なった方がいいんじゃない？」  
B みんなの意見をどうやってまなボードに書くか、悩む。  
少しかさねる。（こうごに） とまなボードに書く。  
「イメージがつかない。」とつぶやく。



### 楽器を鳴らして音楽をつくらう

実際に音を出して、まなボードに書いた工夫を試していきます。この場面は、Aが中心になって話し合いをしました。



B 音を少しずつ重ねる。とまなボードを書き直す。

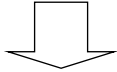
A→B すずの打ち方をアドバイス

B いろいろな打ち方を自分で考えて試す。

T 「順番は決まった？」

A グループの音楽について先生に説明する。

B 「Cさんとぼくは、いっしょにたたくときは、最初は小刻みに鳴らして、終わりにシンバルとすずの音を合わせる。」と、AとCに伝える。



各グループの中間発表を聞きます。

《Bの変容》

初めのうちは、他のグループの発表に興味を示さない。

→3グループの発表を聴き、拍手をする。

「音を重ねていました。」と発表。

→4グループの発表を聴き、「おー。」と言って拍手をする。

→5グループの発表を聴き、「あっ、分かった、繰り返す」「魔法の音っぽい。」

他のグループの発表を聴くたびに、Bの興味・関心が高まってきました。他のグループの「まほうの音楽」を聴き、自分たちの音と比べることで「まほうの音楽」とはどのような音楽か、イメージがわいてきたようです。



## できたよ、ぼくたちのまほうの音楽！

もう一度グループでの音楽づくり。ここでは、Bが話し合いをリードしました。

B 「もうちょっと工夫しよう。」と2人に伝える。

B→A 「最後、鳴らす順番とテンポを変えてみたら？」と積極的に音楽づくりをする。回数、鳴らし方を何回も2人に伝えて確認し、やってみる。

B 「さっきのようにやるんだよ。」と2人に伝える。

3人で「まほうの音楽」を発表した後に、Bが「音を重ねたり、繰り返したり、順番を決めたりした。」とクラスみんなに説明しました。

なかなかイメージをもつことができなかったBが、他のグループの発表を聴いたり、友達と話し合っ、実際に楽器の音を鳴らして試したりしていくことを通して、自分たちのイメージする「まほうの音楽」に近づけていこう、もっともっと工夫をしていい音楽にしたいという気持ちが高まり、話し合いを主導していくまでに至りました。これからも対話を通して考えを深める授業を目指して、全教員で励んでいきます。



## 対話を通して考えを深める授業

掛川市立佐東小学校 高橋 万浦

T「生きる」ってどういうこと？

S「命があること」「考えられるということ」「当たり前だけど、動けるということ」

T「普段、命について考えることはある？」

S「あんまりない。」

T「そうだよね。今日はね、命についてじっくり考えてみたいと思います。」

いつも元気で明るい子どもたちの表情が、ぴっと引き締まりました。「命」について、真剣に考えようという空気が教室を包み込みました。5年生の道徳「電池が切れるまで」の授業を紹介しながら、本校の取り組みをお伝えします。

### 由貴奈ちゃんってどんな子だろう？ ～導入のつかみ～

「電池が切れるまで」は、神経芽細胞腫で11歳で亡くなった宮越由貴奈ちゃんが亡くなる4ヶ月前に書いた「命」という詩、そして由貴奈ちゃんの生き方を紹介した話です。話を読む前に、由貴奈ちゃんの友達が由貴奈ちゃんのことを書いた詩を紹介しました。「由貴奈ちゃんは、自分のことよりも人のことを考えられる優しい子だね。」と、由貴奈ちゃんの人柄を全員で確認しました。その後、「実は、由貴奈ちゃんは今、この世にはいません。」と伝えると、子どもたちははっと息をのみました。「命」についての授業だと聞いた時点で、子どもたちは予想していたかもしれませんが、自分と同じ年齢の子が亡くなるという経験は、なかなかあることではありません。「どんな話だろう。」「なぜ亡くなってしまったのだろう。」子どもたちは真剣に話に耳を傾けました。

導入は、教材と出合う大切な時間です。同じ教材でも、出合わせ方によって子どもの受け止め方は全然違ってきます。「どうしてだろう。」「考えてみたいな。」など、子どもが興味を持てるような導入の工夫を考えています。

### 「命」「生きる」ことについてどう考えた？ ～中心発問の工夫～

話を読み終えた後、あえて、いろいろな考えが出てくるような発問を投げかけました。「由貴奈ちゃんは命を大切にしていた。」「精一杯病気と闘った強い子。」と、由貴奈ちゃんに対して考えを持った子、「命を大切にしていない人がいることはとても嫌だ。」「自殺やいじめで命を落とすなんて悲しい。」「優しい心を持った人が増えればいじめはなくなる。」と、命やいじめについて考えを持った子など、「命」について様々な視点の考えが出ました。アメリカで起きた黒人差別問題と重ねて考える子もいました。しかし、このままでは意見の出し合いで終わり、考えを深めるところまでいきません。そこで、大切にしているのが、子どもたちへの問い返しです。

## 「えっ？」一瞬立ち止まって考える ～問い返しの引き出しを増やす～

一通り子どもたちの意見を聞いた後、次のように問い返しました。

T「命は誰のもの？」 S「自分のもの」

T「そうだよね。自分のものなら、自分で生きるか死ぬか決めてはいけないの？」

「えっ」と一瞬立ち止まった子どもたち。自分のものなら自分でどうするか決めていいはずですが、でも命に関しては、自分で「死ぬ」と決めてはいけない。なぜだろうと。

「自分のものだけど、周りの人が悲しむから自分で命を絶ってはいけない。」「自分のことを大切に思ってくれている人がいるから、周りの人のためにも命は大切にしないといけない。」「命は自分だけのものではない。」など、一瞬立ち止まって「命」について、深く考えられたように思います。

「命は大切」なんて誰もがわかっていることです。だからこそ、子どもたちが一瞬立ち止まって「なぜだろう」と考えられるような問い返しが必要なのです。私たち教師は、いくつもの問い返しを持って授業に臨むようにしています。もちろんすべてを使うわけではありません。どのタイミングで、どの問い返しをすれば、子どもたちがより深く考えられるだろうかと、常に考えながら授業を行っています。



## じっくり振り返る ～振り返りの時間の工夫～

「最初、命は自分のものだと思っていたけれど、自分だけのものではないと思った。」「今できることを精一杯やりたい。」ワークシートの振り返りから、授業前と後で、考えが深まった様子が見て取れました。子どもたちは「命」について、そしてこれからの「生き方」について、自分なりにじっくり考えられたようでした。

## 対話を通して考えを深める授業を目指して

本校は「道徳」を窓口教科とし、研修に取り組んでいます。対話というと、まずペアや少人数グループでの話し合いを思い浮かべるのではないのでしょうか。しかし、「自分」「教材」「先生」「偉人」「クラス全員」など、様々な対話の形があります。特に今年度は、コロナ感染防止対策のため、少人数での対話ではなく、クラス全体での対話が増えました。ともすると、発言が得意な子だけで授業が進んでしまいます。発言する子はもちろん発言しない子も常に頭の中で考えている状態であるように、そしてその考えが深まるようにすることが教師の役目です。今年度は教師自身が教材を深く理解することに力を入れています。そうすることで、よりよい発問、問い返しなどの工夫ができ、目指す授業に近付くと考えるからです。本校は単学級のため同じ学年の教師同士で相談することはできません。しかし、気軽に相談できる雰囲気があり、他学年の教師との学年を超えたやりとりがよく聞かれます。いざ授業をすると子どもたちが、教師の予想外の価値ある発言をすることがあります。「なるほど。そういう考えもあるのか！」子どもと一緒に教師も考えます。とても楽しい時間です。これからも子どもたちと一緒に考えを深める授業をつくっていきます。



## 対話を通して考えを深める授業 ～考えを深めるために～

掛川市立中小学校 富井 美帆

中小の子どもたち…やるべきことに真面目に取り組む、互いのことをよく知り、助け合えるなど、たくさんのおよさをもっています。授業でも、課題が与えられると「やってみたいな」「できそう！」とすぐに取り組む始める子どもたち。自分の考えを相手に伝え、仲間と対話する中で…「こんな考えもあるのか!」「この考えいいな。」「私と同じ考え方だな。」と新たな発見をし、自分の考えをよりよいものにしていこうとします。中小では、そのような対話を通して考えを深める授業を目指して、各学級で『考えを深める』に焦点を当て、手立てを考え授業に取り組んでいます。

### 学び合い、高め合う授業 ～自信をもって対話できる姿を目指して～

「お話の『中』の部分にトラブルが起きるといいね。」「どうやって穴から脱出したのかな。」これは、単元の終盤に子どもたちが伝え合ったアドバイスの一部です。

お話の作者になって物語を書くというこの単元。書くことに抵抗のある子どもたちは「自分たちに物語が書けるのか。」という不安いっぱいでも臨みました。しかし、今まで学習した物語を振り返りながら、物語の構成について学んだり、面白い物語の要素を確認したりしていくうちに、はじめは漠然としていた物語の型がはっきりしてきました。そうになると、想像力豊かな子どもたちは一刻も早く自分の物語を書き始めたくて仕方ありません。下書き用紙を配ると一斉に書き始めました。そんな思いの詰まった物語ですが、やはり校正は必要です。今回は友達の作品を読み、付箋にアドバイスを書いて渡すことにしました。観点を伝えただけで、物語の型が頭に入っている子どもたちは先のような的確なアドバイスをすることができていました。「自分では気付かなかったな。」とどこか嬉しそうに付箋を眺める子どもたち。学びが深まった瞬間です。型が分かっているからこそ、お互いを高め合う対話ができるのですね。

### 「みんなが分かる授業」～算数の授業を通して～

小数×小数の計算の仕方を、言葉や図を用いて考えた「小数のかけ算」。

授業の導入では、ペンキの量や塗ることができる面積を、実物を用いて視覚的に表し、数量や式のイメージをもたせました。また、計算のきまりを用いれば、既習事項である「小数×整数」や、「整数×小数」に直して計算できそうだという見通しを共有すると、どの子も「やってみたい!」「できそう!」の気持ちをもつことができました。

自分の考えを全体に広める際には、みんなの方を向いて発表したり、同じ考えの子が、発表に合わせて、その黒板に書き表したりする等、2人で協力しながら説明ができました。

教師は、授業のコーディネートを努め、できるだけ話す時間を減らしました。子ども主体で授業が進むように心がけたことで、子ども同士が学び合い、分かるまでとことん話す・聴く姿が身につきました。





## 未来の作家になれるかな？ ～「はじめ」「中」「おわり」がわかったかな～

「この地図面白いね。」「地図を見ていると冒険に行った気分になるよ。」宝島の地図を基に自分で物語を書くことに挑戦した3年生。起承転結という言葉はまだ知らないけれども、「始め」「中」「終わり」で、物語が構成されていることは、承知しています。「起こったことなら、どんどん書けるのに。」「メモはあんなに書けたのに。」と、いつの間にか鉛筆を持つ手が止まってしまいました。思いついたメモは、どんどん書けるが、それをいざ物語にするために、何をそれぞれの柱にするのかチョイスするのに大変戸惑った様子を感じました。チョイスができていた何人かのところで密にならないながらも、気をつけた点について聞いてくるようにアドバイスすると、後は物語の骨格を作っている3つの柱を、自分のものにしようとお互いに真剣に話し合い、聞き合い、確認し合いと自分たちの力で授業を作っている子どもたちに感動しました。

## 子どもたちの深い学び ～特別支援学級たんぼぼ組の取り組み～

「理解すること」「考えること」に支援が必要な子どもたちにとって、学習の場は、不安なく楽しく取り組める場であることが大事です。「やってみたいな」「やってみようかな」と感じられる課題や、ちょっと頑張ればできる課題に取り組み、似たようなことを何度も繰り返す中でやがて自分一人でもできるようになることが自信につながります。学習の場はクイズやゲームに取り組むような楽しいものだったり、パターン化し「何をどのように進めるのかがわかり不安なく取り組める」ものだったりします。

そんな中でも、「自分の考えを持つ場」は大切です。答えが浮かばないことにあせりや不安を感じさせないために、選択肢を提示することで考えをもつヒントにしてきました。選択することができた時には、「なぜ?」「どうして?」と問うようにし、その答えに詰まってしまったときには、「〇〇さんは、どうしてそう思ったのかな?」と別の子からヒントを引き出し、「考える」習慣をつけるようにしてきました。

## 夢学習 ～ゲストティーチャーから学び、自分の将来へ～

6年生の総合的な学習の時間『夢学習』。今の自分に対して、将来に対して、まだまだ自信が無いという実態からスタートしました。4月の実態調査では、働く目的も『お金』や『生活の安定』が一番多かったですが、多くのゲストティーチャーとの出会いや体験活動で子どもたちの意識は変容しました。前半は、中地区で活躍する方や本学級の児童の保護者を招きました。全国でも有名な中地区自慢のトマトを栽培している笠原さんや日本でこ



こしかない部品を作っている林製作所の林さんの話を聞きました。そのお話から、『挑戦』『やりがい』『感謝』『役に立ちたい』という新しい働く目的の視点が児童に加わりました。後半、特に子どもたちの夢につながる、「保育士」「薬剤師」「空港業界で働く方々」「元プロ野球選手」「看護師」などを招きました。その結果、より将来の夢に対する意欲が高まり、具体的に今すべきことやこれから中学、高校とどう進めば夢に近づけるのかということも考えることができました。

# 学びで心の鐘をひびかせよう！

掛川市立大坂小学校 浅野 恵子

「先生、今日はかげおくりができそうな空だね。」と朝から一面の青空を見上げて話してくる子。休み時間にかげおくりをして空にうつったかげぼうしを見て、嬉しそうにぴよんぴよん飛び跳ねる子。

子どもたちは、どうしてこんなにかげぼうしに夢中になっているのでしょうか。それは、国語の学習をしたからです。

3年生の国語では、物語文「ちいちゃんのかげおくり」が登場します。戦争の時代を生きたちいちゃん一家のお話です。

家族4人のかげおくりが胸に深く焼き付きます。授業が進んでいくと、「ちいちゃんの勉強あと何時間残ってる？」「終わりたくない！」こんな声まで聞こえてきたのです。

大坂小では、クラスの自慢ができたとき、シンボルである『心の鐘』を鳴らします。「先生、今日はみんなで意見をつなげた授業ができたから、心の鐘をならしたい！」この学習の終わりに、にこにこ笑顔で心の鐘広場へ向かう子どもたち。

そんな、物語の世界に没頭した児童のものがたりを紹介しながら、本校の取組をお伝えします。



## 主体的に学べるしかけ作り！

大坂小職員は、主体的に関わり合って学びを深めていく子の育成を目指しています。そのために、「子どもたちに付きたい力をはっきりさせて各単元の流れを考えること」や、「必然性のある課題にすること」、「課題に合った話合いの場を設定することを大切にしています。

本単元では、あらすじを捉える学習で、各場面の「主人公がしたこと」を表にまとめていくというしかけをしました。すると、戦争から何十年後の公園の様子を扱った最後の場面の学習時、

児童A「あれ？ちいちゃんはこの場面にはいないよ！」

B「なんで作者はこの場面に主人公書かないの？」

C「主人公がいないなら、この場面いらんじゃん。」

D「でも・・・私はこの場面は、いると思うな。」

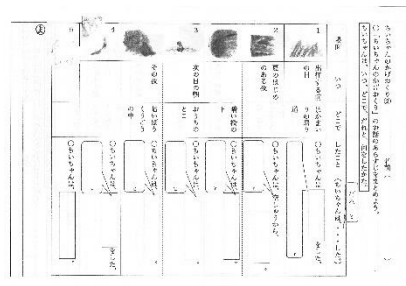
教師「この場面はいる？いらん？」

→みんな【いる】と【いらん】が半々ずつ。

E「作者のあまんさんが伝えたいことがあるんじゃない？」

F「お話は、作者が伝えたいことがあるから書くんだよ。」

こうして、『最後の場面であまんさんが伝えたいことを考えよう。』という単元を通した大きな課題を自分たちで作り上げました。自分たちでつくった課題を解決するという目的をもって、毎時間読みを深めていました。



## 本で広がる世界！

児童G「先生、ちいちゃんのお話はかげおくりが遊びだったけど、こっちの戦争の本は、違う遊びが出てきたよ。」

H「戦争のせいで動物たちが殺されちゃっていたなんて・・・。」

単元が始まったと同時に戦争をテーマとした本をたくさん用意すると、次々に読み進めていた子どもたち。そこから戦争の時代背景を捉える姿がありました。

I「もう戦争の本20冊以上読んじゃった。」  
積極的に読み進める子がたくさんみられました。

本校では、読書活動の推進にも力を入れています。学年毎のおすすめ本20冊や年間読書冊数を設定し、どの子ども達成できるように目指しています。



## 共に高め合う「話し合い活動」

ちいちゃんがお母さんとはぐれてひとりぼっちになってしまった場面では、ちいちゃんは、ひとりぼっちになりました。ちいちゃんは、たくさんの人たちの中でねむりました。

の文に着目しました。

児童J「ちいちゃんは、ここは、一人ぼっちになったの2回目。」

K「ちいちゃんは、お母さんらしい人を見つけて1回プラスの気持ちになってる！」

L「あのね、グラフで説明したいんだけど・・・、一回プラスになった後のマイナスだから、一気にど～ん！！ってマイナスになる。みんなもそうでしょ？すばやく落ちるの。」

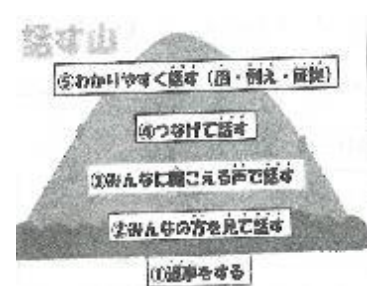
M「うんうん。たとえば、迷子になっちゃったとするじゃん、そうするとまわりが知らない人ばかりだと寂しいでしょ?!」

みんな「うん、うん！」

みんなでどんどん意見をつなげて主人公の気持ちの読み取りを深めていく姿がありました。

大坂小では、話す力や聴く力を高めるために「話す山・聴く山」のステップ一覧表をつくっています。

児童は、どの授業でもそのステップを意識しながら話し合い活動をし、クラスみんなで練り上げているのです。どの学級も対話を通して理解を深められるよう共通して取り組んでいます。



## 作者ともつながる！

単元のゴールに、ちいちゃんへ手紙を書く活動を設定しました。それを単元の最初に発表すると、ガッツポーズをする子や、「ちいちゃんのこともっと知らないといけない。」と毎時間主人公の気持ちを考えてようとする子。

いよいよ単元末に手紙を書くときには、「早く書きたい!」「あまんさんに読んでもらいたい!」との声。そこで、出版社を通して作者に送りました。

後日、出版社から返事が届くと、「額縁に飾って掲示しようよ。」と喜ぶ姿が。大坂小では、子どもの声を受け止め、学びを進めています。

# 「主体的に学び合う子」を目指して

掛川市立千浜小学校 諸星 江里

## 主体的に学び合うために

本校の研修主題は「主体的に学び合う子」。自分事として課題を作り出し、伝え合う活動を通して学びを深めることができる、そんな子どもたちの姿を目指しています。そこで本校では、①学びを深めるための教材研究②対話につながる意欲を引き出す仕掛けの2つを柱として研修を進めています。では実際にどのような授業を行ってきたのか、本校の取り組みをお伝えします。

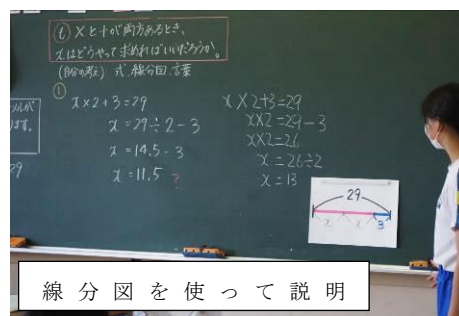
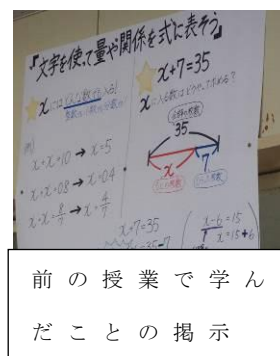
## 6年2組～キャラメル1箱の個数を求めよ！～

「今日の問題はキャラメルです。1箱  $x$  個入ったキャラメルが2箱と3個あります。全部で29個です。さあ、どんな式になるでしょう。」

6年2組で行った「文字を使った式」の授業。今までの授業では、 $x + 4 = 20$ 、 $x \times 3 = 12$  などの計算方法を勉強しています。しかし今回は・・・

「式は  $x \times 2 + 3 = 29$  だ！」 「ちょっとまって、足し算かけ算のミックス？」 「どうやって計算しよう・・・？」

今回の授業の目的は、加法と乗法が混じった式を、今までの知識を使って説くこと。子ども達は習ったことを使いながら答えを導こうとしていきます。式を眺めているだけではいいアイデアが浮かばない……。そんな中、子ども達の思考を手助けしたのは線分図。今までの授業でも使ってきたから、今回も使えるのではないかと、線分図を活用した説明を考えていきました。単元を通した線分図の活用が、子ども達の思考の助けとなりました。“単元を通して何を学ばせるか” その見通しをもつことの大切さを実感した授業でした。

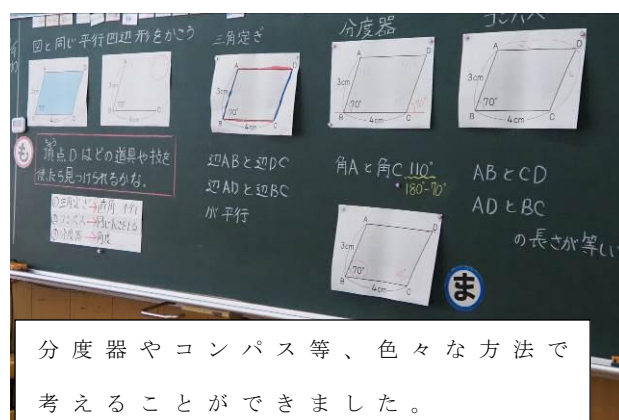


## 4年1組～頂点Dを見つけ出せ！～

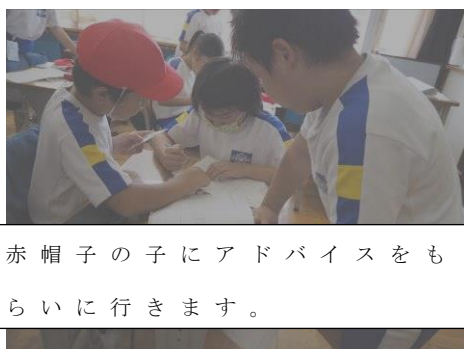
4年1組で行ったのは図形の授業。垂直や平行について学び、平行四辺形のかき方を考えていきます。



「これと同じ平行四辺形がかけけるかな？」教師が平行四辺形の図と、2辺だけかかれた図を提示します。「できそう！」とすぐに反応する子ども達。「何が足りないかな？」という投げかけにも、「点Dが足りない。」「このへんに点Dがきそうだけど・・・」「もうちょっと右じゃない？」と、やる気満々です。ただし今回の授業の目的は、平行四辺形の定義や性質を作図に活用すること。ただ頂点Dを見つけるのではなく、どうやって見つけたのかを定義や性質を使って説明しなければなりません。そこで、自分の考えをワークシートに書いた後、教師が交流の時間をとりました。「説明できる子は赤、説明は難しい子は黒（帽子をかぶらない）、何も書けなかった子は白帽子ね。」帽子の色で自分の立場を明確にさせます。子ども達はそこから自由に交流を始めます。赤帽子の友達の説明を聞きに行こうか、黒同士で説明を考えようか・・・。友達と話しているうちに何かに気付いたのか、ワークシートに考えを付け足している子もいました。



分度器やコンパス等、色々な方法で考えることができました。



赤帽子の子にアドバイスをもらいに行きます。

今回の授業で取り入れられた“交流”の時間。“交流”と一言と言っても、隣の子に説明する、班で話し合う、違う意見の子を探しに行く等、交流の方法は様々です。どんな交流であっても、教師がどのような意図で交流を行わせるかが大切だということを改めて学ぶことができた授業でした。

## 主体的に学び合う

### ～ 主役はもちろん子ども達～

公開授業の後は、教師全員で授業について意見を出し合います。「〇〇さんは導入であまりがないことに着目できていた。」「△△さんと交流したことで、〇〇さんの意見が変わった。」「このワークシートは〇〇さんにとっては難しかった。板書と合わせた方が良さそう。」「授業の内容を子ども達の様子から語っていきます。子ども達が授業でどのように変容したのか、仕掛けは有効だったのか、学習問題は子ども達の思考に沿っていたのか、話し合いたい内容は山積みです。今後も、研修を積み重ねることで、授業力の向上と「主体的に学び合う子」の育成に力を注いでいきます。

# 話し合い活動を通して 「できた」「わかった」を共有する授業

掛川市立横須賀小学校 阿形 竜馬

## 1 はじめに

本校は、平成31年度より『学び合い』に重点をおいた研修を進めてきた。本年度は、研修テーマを『話し合い活動を通して「できた」「わかった」を共有する授業』と設定し、研究の内容を

- ① 夢中で取り組むことのできる課題設定
- ② 自分の考えに自信をもたせる手立て
- ③ 問題解決に向けた、聞く話すの指導方法

として、学習指導に力を入れてきた。

## 2 実践

### (1) 1年生の取組 (②自分の考えに自信をもたせる手立て)

追求する場面で、まず自分で考える時間を確保した。その後、ペアやグループでの話し合い活動を行い、それぞれの考えを紹介し合ったり、質問をし合ったりした。また、全員に確実にやらせたいことなどは、できた子をミニ先生にして他の子に教えるようにした。教わってできた子が、またミニ先生になって別の子に教え、教え合いが広まった。



繰り上がりのあるたしざんの計算や繰り下がりのあるひきざんの計算の仕方を考える学習では、具体的な操作活動を取り入れて自分の考えを作らせた。その考えをワークシートの図に表し、説明を付け加えることで自分の考えを書き表せるようにした。また、自分の考えの書き方の上手な子を紹介し、どんな書き方がいいのか知らせて参考にさせた。

### (2) 5年生の取組 (①夢中で取り組むことのできる課題設定 ③問題解決に向けた、聞く話すの指導方法)

身近な事柄と関連した問題提示を行った。5年算数「単位量あたりの大きさ (1) では、教科書の問題はマットの上に子どもがおり、どのマットが一番混んでいるかというものであった。クラスの実態として、より身近な話題を取り入れ

たほうが単位量の数について考えたく  
なるのではないかと考えた。そこで、  
「密をさけるにはどうしたら良いか」  
という時事に関連した課題を提示し  
た。a（アール）という使い慣れない  
面積の単位ではあったが、数字自体は  
小さな数を扱った。



子どもの考えをつなぐ発問にも力を入れた。問題の補足や助言といった説明を極力なくし、子ども同士の意見や考えをつなぐ発問に重点を置いた。端的な問題（例：こみぐあいの比べ方を考えよう。）の提示→子どものつぶやき（気づいたこと・問題点など）→「〇〇さんの言ったことってどういうこと？」→子どもの発言→「じゃあ〇分時間をとるから、考えてみよう」→・・・というように発問・発言を精選し、最小限にした。また、発言する子を立たせたことで、周りの聞く体制作りを行った。このように子ども同士の考えをつなぐ発問を意識することで、子どもたち自身が集中して友だちの話を聞き、考えながら話すようになった。

### 3 成果と課題

担任が子どもの考えをもたせる場づくりをしたり、教え合いを意図的に組んだりしたことで、子どもたちが自分の考えや意見をもったり、ペアやグループ活動において自分の考えを語ったりすることができた。このように個や少人数で、「できた」「わかった」を共有する姿が見られた。

その反面、全体で自分の考えを伝えたり、素直に「困った」「わからない」を友だちに伝えたりすることができない。また、全校として聞く態度は良くなってきたが、友だちや教師の話を理解しながら聞くということも課題として残った。

### 4 来年度に向けて

令和3年度は、ペアやグループの活動だけでなく、全体の場でも自分の考えや意見を伝えたいとなるような学習問題づくりに力を入れていきたい。また、子どもが内容を理解しながら話を聞くことができれば、より「話したい」「聞きたい」という雰囲気生まれ、子ども同士による対話が起こると思われる。子どもたちが進んで「話したい」「聞きたい」という姿いっぱいの授業づくりを目指していく。

## 「自ら考え 進んで自分の言葉で伝え合う子」が育つ授業

掛川市立大渕小学校 石田 智子

「みんなと話して、わからなかったことがわかったよ。」（1年）  
「みんなと楽しく授業ができた。」（2年）  
「友達の発表に付け足して、話し合いが深まった。」（3年）  
「聴く力がついた。ハーモニー授業をめざして反応などがとてもものびだ。」（4年）  
「近くの友達や班の友達と話し合うことができた。」（5年）  
「自分の考えを進んで発表し、みんなで高め合えた。」（6年）

これらは、子どもたちに行ったアンケートの中で「1年間で自分ががんばったこと。学級の人々と協力してのびたこと。」に書かれていた意見です。

今年度、本校は『自ら考え 進んで自分の言葉で伝え合う子』を育てる授業を研修テーマに掲げ、「主体的な学びを生み出す単元構想」「授業後半の学びを深める展開（仕掛け）」を柱として研修を進めました。新学習指導要領実施にあたり理論を学びながら実践していくことで、教師も子どもも「どのように文章を読み進め、表現し、学びを生かせばよいか」がわかり、「勉強して良かった。」「難しいけれど楽しいな。」と思う瞬間を積み重ねていくことをめざしました。ここでは、窓口教科「国語科」の授業を通して、本校の取り組みをお伝えします。

### 子どもが主体的に学ぶ「単元構想」を支える“学習環境づくり”



本校では、子どもたちが主役の学習にするため、単元の初めに子どもたちと単元のゴールと学習計画を共有します。

1年生の教材「くちばし」の学習では、教師が作成した見本とともに、「おすすめのくちばしクイズを作って、くちばしの形の秘密を伝え合おう！」を単元のゴールとして示しました。

子どもたちは、「自分はどの鳥にしようかな。」「書き方はどうすればいいのかな。」と意欲的な姿を見せました。入学して間もない1年生の子どもたちの学びを支え、意欲を継続させるために、学習環境（学習の足跡の掲示、単元のゴールを示す具体物、ワークシートの工夫、ICT機器の活用、並行読書等）を整えて授業を進めることにしました。

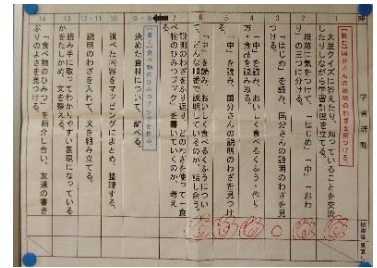
「ハチドリのかちばしは、どうして細くて長くのびているのか。」という学習問題で話し合った時のことです。問題解決に至っていないと感じた教師は、ハチドリと花の実物大の模型を提示し、「蜜はどこにあるの？」と切り返しました。すると、子どもは「花の中です。」「花の奥にあります。」と理由に気づき始めたのです。そこで、実物投影機を使ってくちばしを花の奥に入れる操作活動をさせ、それをテレビ画面に映し出した瞬間、子どもたちの中から「だからかあ。」とつぶやきの声があがり、細くて長くのびたくちばしの理由を納得し理解することができました。



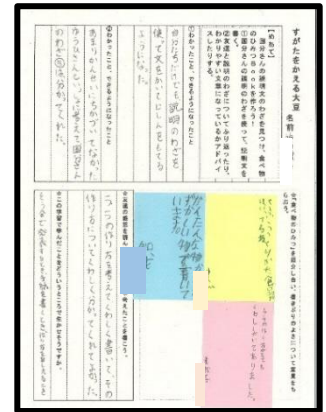


## 主体的に学びを生み出す「単元計画」の工夫（メタ認知力※の育成）

「学習環境を整える」ことに加えて、次に研修で深めたことは単元計画の工夫です。子どもの主体的な学びを持続させるためには、メタ認知力を育てる必要があります。それは、新学習指導要領の第3観点「学びに向かう力・人間性」を培うことにつながります。そこで、単元計画に第3観点を育てる場と手立てを位置付けて授業を行いました。



3年生「筆者の説明文のわざを見つけ、食べ物のひみつBookを作ろう！」（教材名「すがたをかえる大豆」「食べ物のひみつを教えます」）の実践です。学びに向かう力を育てるために、「次時の見通しと振り返りができるシート」を活用して自己評価をさせたり、説明文のわざについて学び合う時間を設定したりしました。そして、学んだ説明文のわざを自分の「食べ物のひみつBook」に取り入れることができました。単元の終わりに「自分にどんな力がついたか」「どこで生かせるか」振り返ったところ、どの子も自分が獲得した力と生活の中で生かす場を挙げられたことから、自己教育力が育ち、学習意欲が継続したことがわかりました。



※メタ認知力…自分を客観視する力

### 授業後半の学びを深める授業展開（交流を仕掛ける）

今年度は、感染症防止対策のため例年同様の話し合い活動はできませんでした。しかし、学びを深めるためには子ども同士の深い話し合いが不可欠です。そこで、2学期からねらいをしばって、短時間で行う交流活動を徐々に進めてきました。

6年生の「和食の魅力を伝えるパンフレットを作ろう！」（教材名『鳥獣戯画』を読む「調べた情報の使い方」「日本文化を発信しよう」）の実践です。

学習問題を確かめた後、自分の考えをもつ一人学びと学びを深めるための個別交流の場を設定しました。教師は交流の視点を2つに絞り、ICT機器を活用して提示しました。はっきりとした目的意識を持った子どもたちは、友達と積極的に関わり、相手の理由を聞いて「なるほどね…、ぼくは～」と自分なりの考えを伝えたり、「それってどういうこと？」と詳しく説明を求めたりして自分の考えを深めようとしていました。また、自分の考えを持っていなかった子どもにとっては、交流により考え方をを見つけることができたのです。この個別交流を経て、全体交流でさらに考えがまとめられたり、深められたりしていきました。



### 綿密な単元計画と発問や交流の工夫が、主体的な子どもの学びを生む

今年度、子どもが意欲的に授業に取り組み、友達と関わりながら学習する姿が見られました。そこに関わる教師自身も子どもとの授業を楽しむことができました。それは、教師の子ども理解と教材研究、効果的な手立てを仕掛けることで、「やってみたい。」「自分にもできそう。」という思いを引き出した結果と言えます。これからも、子どもの可能性を信じ、学びを深める指導に挑戦し続ける教師集団でありたいと考えています。

# 栄川中のものがたり

掛川市立栄川中学校 高橋 達也

## 避けられない現状

新学期がスタート。しかし101人の本校生徒との出会いからわずか3日で休校。生徒のいない学校で何ができるか。休校中に、生徒役も教師が行った社会科の授業を実施した。本校ではこれまで「話し合い活動の充実」を実践し、小集団活動を授業の中で多く取り入れてきたが、コロナ禍ではこれまで通りにいかない。この状況下で何ができるか、どうすればできるかを教師自らで体験しながら模索していった。

机の向きは変えないが、顔を合わせ、言葉を交わすことは可としよう。席の移動も極力抑えつつ、学級を一つの小集団として考えて展開しよう。課題提示における発問や配布資料にもこれまで以上に工夫が必要になることが見えました。学校再開後の授業では、教師側の押さえを理解しつつも、生徒はこれまで通り班員や周りの人と話し始めました。栄中生にとって授業とは、話し合いから始まるのが身体に染みついています。



## 考える道徳の実践

毎週火曜日は道徳の日。道徳は学級担任が授業を行います。学年主任も授業をします。様々な場面において職員が一丸となって栄中生を育てています。今年は全学年全学級で同一教材にて実施することにも挑戦しました。同じ題材ですが、生徒の発達段階に応じて発問を変化させました。授業後には、それぞれの実践を振り返りながらの研修を行いました。

「T君の発表は、K君の意見を参考にして発言していたのがすごい。」「この場面の主人公の心情が理解できなかった。」「行動面に視点がいったしまったが、主人公の気持ちに視点を向けたかった。」「小集団を使わずに、他者との関わりをもたせるには、教師の意見の吸い上げ方が重要になるね。」

生徒の表情を思い浮かべながら、どうしたらよりよい授業になるかを日々研修しています。



## 学習を深めるために

勉強が好きな生徒もいれば苦手な生徒もいます。特に数学ではこの差が顕著に表れます。しかし、栄中生は決して諦めませんし諦めさせません。自分が理解できた生徒は、周りで困っている人に進んで声をかけます。

「この計算、順番はどこからやればいいのかわかる？」  
「その考え方で、なんで答えが出るの？」 「式はあっているはずなのに答えが出ない。どこがおかしい？」…  
こんな声が、毎時間あちこちから聞こえてきます。わからないことをわからないといえる雰囲気。学級みんながわかろうとする雰囲気。これも栄中生のよさの一つです。中には、「教えるって難しい」「自分がしっかりわかっていないと教えられないな」と授業後に振り返る生徒もいます。

この姿は、幼稚園・小学校・地域・家庭を含む栄川学園として子供たちを育ててきた成果の一部です。



## 私たちにできることは

学校が果たす役割は多岐に渡ります。生徒たちは、授業や部活、学校行事などさまざまな活動に毎日全力で取り組んでいます。後期生徒会は「1 set of 3～自ら挑戦～」を基本方針として発足しました。その活動の一つとして行った『コロナに負けないぞ宣言』。この取り組みは総合的な学習の一環として実施しました。

栄川中学区に住む高齢者の方がコロナ禍で外出もままならず、他者との関わりが減り寂しい思いをしているという話を聞いたことがきっかけです。生徒会では、高齢者一人一人に生徒が手紙を書き、直接届けるプロジェクトを考えました。生徒の思いに教師も動かされ、学校一丸となって取り組みました。誰が手紙を書くのか、誰が届けるのか、いつ届けるのか…。生徒だけではなく、保護者そして地域も巻き込んだ活動へと発展していきました。最終的には、多くの方からお礼の電話や感謝の手紙をいただくことになったのです。

生徒の思いを尊重しつつ、学校ができることを模索しながら、栄川学園幼・小・中12年間をかけて子供たちへ働きかけていきたいと考えます。これからもご協力お願いします。





# 短歌っておもしろい！

掛川市立東中学校 杉山 晃弘

「短歌は人の体温に一番近い表現形式である。」

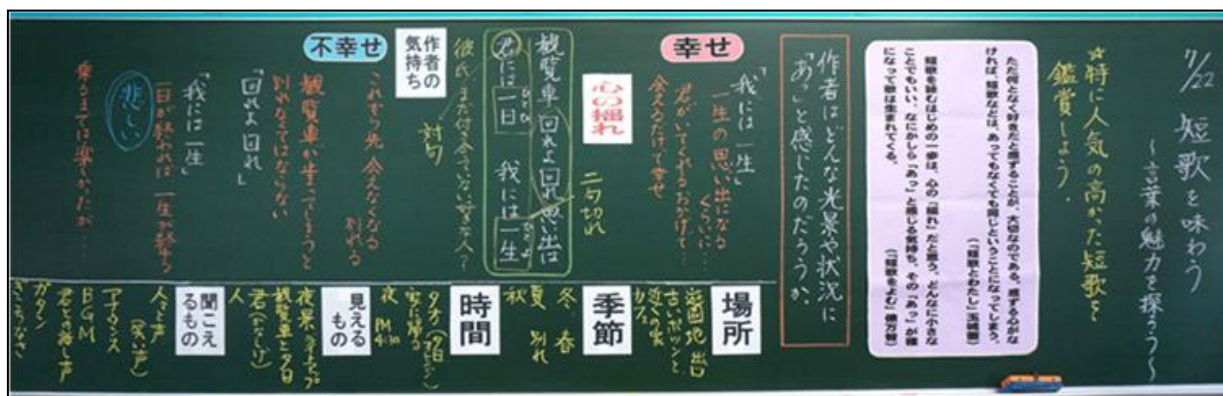
歌人で、文芸評論家の三枝昴之さんは、短歌についてこう表現しています。

何気ない日常の1コマを切り取り、私たちが普段使っている言葉を組み合わせると、そこに私たちの知らない新たな側面を発見できることが

「短歌の魅力」であると感じています。しかし、短歌を学習していくことを生徒たちに伝えると、必ず初めに「昔っぽい」とか「難しそう」とかいう反応が返ってきます。このマイナスイメージを何とか払拭できないか。そして、短歌がいかに関魅力的なものであるかということに気づいてもらいたい。そう考えて、授業の中で以下のような手立てを講じることにしました。

## 魅力ある問いの設定 ～短歌の鑑賞～

有名な歌人である俵万智さんの言葉「短歌を詠むはじめの一步は、心の『揺れ』だと思ふ。どんなに小さなことでもいい、なにかしら『あっ』と感じる気持ち。その『あっ』が種になって歌は生まれてくる。」を引用し、この言葉を拠りどころとして、「『観覧車回れよ回れ想ひ出は君には一日我には一生』の短歌の作者はどんな光景や状況に『あっ』と感じたのか」を追究しました。それによって、唐突に「作者はどんな気持ちだろう。」と問うよりも、必然性のある問いになるのではないかと考えました。また、より多面的な見方を可能にするために、後半の生徒を「揺さぶる」補助発問として、「作者は『幸せ』か『不幸せ』か。」という問いを立てることにしました。前半は、短歌に使われている「言葉」「場所」「季節」「時間」「見えるもの」「聞こえるもの」などのイメージを言語化させていきます。「季節は冬で、人恋しい感じ。時間帯は夜をイメージしたから、見えるものは夜景で、聞こえるものは観覧車の動く音だけ。車内には2人のぎこちない雰囲気漂ってる。」「季節は秋で、夕日がきれいな感じがするから、夕焼けに染まった観覧車をイメージしたよ。見えるものは『君』の顔、聞こえるものは車内BGM。」季節や時間などは、読者にゆだねられていて、その自由な鑑賞がゆるされた部分をどう読むかによって、全体の印象がかなり変わってくるということを実感した生徒が多かったようです。また、後半の「作者は『幸せ』か『不幸せ』か。」という問いに対しては、「『君』に会えるだけで、一緒にいられるだけで幸せ。『我には一生』で一生分の幸せをかみしめている。」という意見の生徒がいる一方で、「『回れよ回れ』で観覧車が止まってしまったら、『君』ともう会えない。先がないから不幸せ。」という意見の生徒もいました。最後は、それらが短歌のどの表現から読み取れるかということを生徒に切り返し、「回れよ回れ」の二句切れが感動の中心を表すこと、「回れ」の繰り返しや「君には一日我には一生」の対句表現に強調の効果があることなどを確認することで、本時の目標に迫ることができたと考えています。





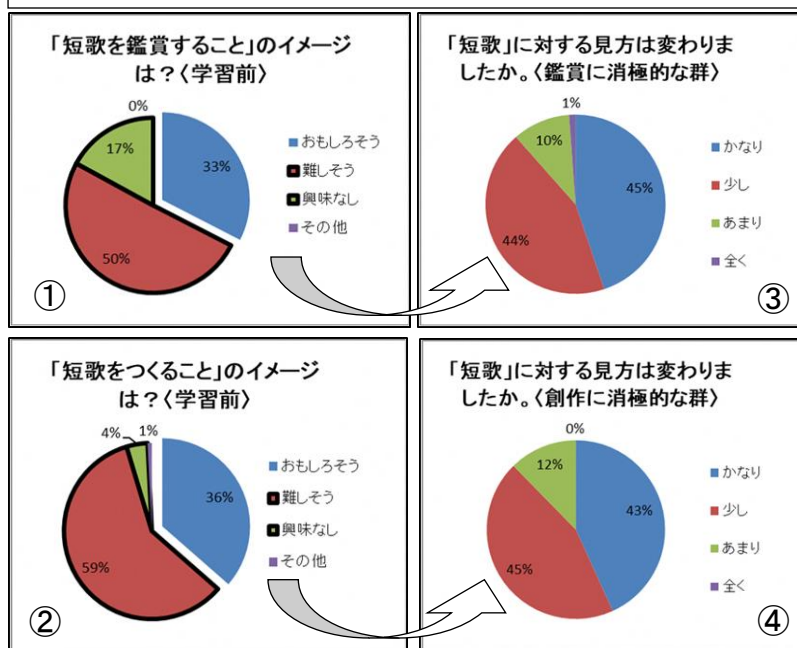
## テーマ設定で同じ土俵に立たせた短歌づくり

単元の終末部では、これまでの学習を生かし、短歌づくりに挑戦させました。その際、全く制限をかけず、自由に自分の思いや考えを表現させるのもよいですが、今回はあえて「学校生活」というテーマを設けて、そこから連想される場面や情景を短歌にさせることにしました。テーマを「学校生活」とすることで、家庭環境や生活経験の違いによる差が生じにくいため、誰もが共感しやすく、また、同じ土俵に立たせることで、鑑賞の際、言葉の選び方や表現の工夫に焦点を当てやすくなると思ったのです。以下に示したのは、実際に生徒がつくった短歌と、その短歌をつくる際にこだわったポイントです。これまで学習してきたことを最大限に生かし、表現者として一つ一つの言葉をよく吟味して使っていることがわかります。

- ・「授業中 体育館から 聞こえる ドレミファソラシド 悪魔のメロディ」  
→「授業中」「体育館」「ドレミファソラシド」の言葉でシャトルランを表した。「聞こえる」か「聞こえてる」かで迷い、「聞こえる」のほうが、迫ってきているみたいで、よりシャトルランを恐怖に感じていることが読み取れると思ったため、「聞こえる」にした。
- ・「5時間目 まぶたの裏を見つめてる 仕事さぼるな 私の手」  
→「寝ている」と言いたいところを工夫して、「まぶたの裏を見つめてる」と表現した。最後は「私の手」で、「字足らず」「体言止め」にして強調するところにこだわった。「さぼるな」という言葉は、自分をおこっているように表現した。
- ・「じっと見る テスト返して つくられた 紙のすみっこ 小さな三角」  
→先生がテストを返却するとき、点数が見えないように解答用紙の隅を折って返してくれる。隣の友だちの点数が「気になる」気持ちを「じっと見る」というように遠回しに表現するところにこだわった。なるべく「うれしい」「悲しい」などの感情を書かずに伝わるようにした。リズムよく終わるように体言止めを使った。

## 「短歌」の見方が変わった!!

- ・この授業を受ける前は、短歌はもっと堅苦しくて、頭のいい人がつくるもの、つまらないものだと思っていたけれど、実際につくってみると、いかに気持ちや情景を文字で表すかを考えるのがおもしろかった。また、みんなの短歌をみて、こんな斬新な表現・アイデアもあるのかと短歌の可能性が広がったように感じた。（生徒アンケートより）



生徒の学習前アンケートで、「短歌を鑑賞すること」と「短歌をつくること」のイメージを質問すると、「難しそう」「興味なし」といった消極的な内容の回答が「鑑賞すること」では67%「つくること」では

64%に上っていました。（①②）しかし、学習後、これらの生徒に「『短歌』に対する見方は変わったか」という質問をすると、それぞれおよそ9割の生徒が「かなり変化した」あるいは「少し変化した」と回答したのです。（③④）

# 子どもが主役の授業を目指して

掛川市立西中学校 長谷川 景子

西中学校では、生徒の主体性や自主性をさらに伸ばしていくために、学校教育目標を「未来に向かって、チャレンジする生徒」と掲げ、学校行事や委員会などの特別活動、生活面や学習面など様々な場面で「生徒が主役として輝く学校」を目指して取り組んでいます。

## 1 生徒の“つぶやき”を大切にした授業

「子どもが主役の授業」を目指す共通実践項目として、すべての教科で生徒のつぶやきを大切にした授業に取り組んでいます。すると、気軽に意見を出し合える雰囲気学級内にでき、物静かな生徒でもつぶやけるようになってきました。このつぶやきを大切にしようという意識は、生徒も教師も生徒が主体の学校を目指そうという基礎となっています。

### 【授業例①】

3年生の美術科の授業『和のころ～オリジナル和菓子づくり～』では、本物の和菓子を目の前に、様々なつぶやきが生まれました。色や形やテーマといった視点で、和菓子の特徴を友達と共に話し合う中で、一人一人が造形的な見方や考え方を広げていきました。



西中学校では、単元全体を構想しながら生徒が思わずつぶやき、考えたくなるような授業を目指していきます。

## 2 学びを深める交流を取り入れた授業

「子どもが主役の授業」を目指し、本年度は授業の核となる学習問題とともに、「学びを深める交流」に焦点を当て、授業研究に取り組んでいます。

### 【授業例②】

理科の見方・考え方を働かせ生物を分類する、特別支援級の授業では「自分が動植物園の園長だったらどうやって展示しよう？」と問題が投げかけられました。与えられた展示ゾーンは2つ、26種の生き物を分類しなければなりません。

生徒たちは、生き物の特徴や相違点に着目し、相談したり教師に話しかけたりしながら、自分なりの考えを作り出すことができました。次に、自分が園長としてゾーン分けした理由を『観点』と『基準』という言葉を使って発表し合いました。仲間の見方・考え方に触れ、生徒はさらに自分の考えを深めていきました。



西中学校では、主体的に学びに向かう姿を育成するために、これからも生徒が協働的に学び合う「学びを深める交流」を、授業の中で積極的に設定していこうと考えています。

### 3 「子どもが主役の授業」×タブレット

#### 【授業例③】

2年生の国語科の授業『令和っ子は語る地球の未来』では、書く力を高めるために、世界や日本が抱える課題について、タブレットを使ってまとめ、発表を行いました。生徒からは「えっ！世界ではこんなたくさんの人が飢餓で苦しんでいるの？」「実は世界だけじゃなく、日本でも1日1食の人がいるみたい！」というつぶやきが生まれました。生徒たちは、今まであまり知らなかった地球上の課題と向き合い、解決策を模索する中で自然と「クラスみんなに伝えたい」という思いが高まったようです。そのため、生徒一人一人の思いが詰まった、伝えるためのパワーポイントができあがりました。

友達の発表を聞き「1日に数万トンの食料廃棄がある今の状況を、すぐには直せないけど、給食の残量はなるべく減らしたい。」と感想をもつ生徒も現れました。そして発表会のあと、給食の様子はいつもと少し変わっていました。

西中学校では、来年度からのGIGAスクール構想（一人1タブレット）を視野に入れ、生徒がより主体的に学ぶため、生徒がより学びを深めるために、どのようにタブレットを授業に取り入れていくか、授業研究に励んでいきます。





# 深い学びを達成するために

掛川市立桜が丘中学校 川中 瑞貴

## 目指す姿へ

本校が目指す姿は「大志を抱く（自分から取り組み、自分で考え、判断できる）生徒」「共生できる（他者の考えを認め、支え合う）生徒」「挑戦する（我慢強く最後までやり遂げ、言動に責任をもてる）生徒」である。これらの姿へ向かうために、今年度の授業では「発問」にこだわりをもって取り組んできた。今回は、1年生のある学級の授業の様子を紹介する。

## G O T O ト ラ ベ ル を 数 学 的 に 考 え る

「より安全な県を、お客様にわかりやすく説明しよう」これは、単元の最初に提示した学習課題であり、単元を貫く課題となる。中学1年生の数学「資料の活用」を「GOTOトラベル」の話題を用いて学習していく。単元の第1時間目にいきなり、5つの県（フィクション）の直近のコロナウイルス新規感染者状況（一日当たりの新規感染者数）の表を配付する。

「あなたは旅行会社桜が丘ツアーズの社員です。様々なデータから、より安全な県をお客様にわかりやすく説明してみましよう。」生徒たちは一斉に数値を分析し始める。各々が自分なりの思いをもって考える。生徒たちはどんな情報を根拠にして説明するのか。様子を見てみると、多くの生徒が既習の「平均値」で比較していることに気付いた。しかし、生徒たちからこんな声が。

「一日当たりの新規感染者数の平均を求めてみたけど、全部同じ数値になったから比べられないです…。」

実は、平均値がすべて同じ数値になるようにデータを作った。「これでは比べられないよ。どの県か決められない。」困った生徒たち。他の方法も試すが、しっくりこないのか、納得できない様子だ。

「先生、わかりやすく説明するために何か良い方法はないですか。」

「この単元を勉強していけば、何か良い方法が見つかるかもしれませんよ。」

「なるほど。いろいろな方法を教えてください！」

こうしてこの単元の幕が開けた。





## 主体的に受信する力・発信する力

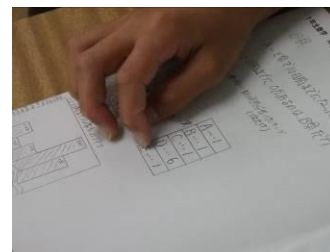
生徒たちは、お客様への説明を完成させるためにこの単元の学習を進め、必要な知識・技能、考え方を授業ごとに見つけ習得していく。一体、単元の最後にはどんな姿に成長しているだろうか。

「平均値みたいな比べるための数値は他にないのかな。」

「データの特徴を表す代表値というものがありますよ。」

「見た目で見やすい方法があれば、お客様にわかりやすく伝わるかもしれない。」

「表やグラフで表す方法がありますよ。」



生徒の思いが学びへの意欲となり、そのまま単元の学習にリンクしていく。「こんな情報があったらよいのにな…。知りたいな…。」それぞれの学習に切実感をもって取り組んでいく。主体的に学ぶ姿がそこにはある。

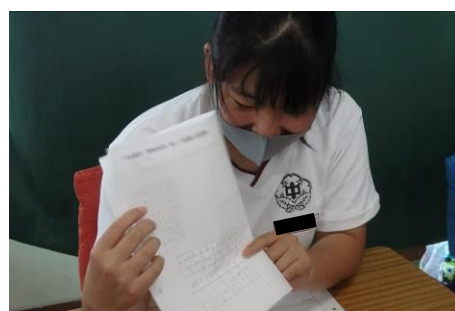
「この中央値とか最頻値は、平均値みたいに分析で使えるかもしれない。」

「度数分布表やヒストグラムを使えば、目で見て比べやすいから相手に伝わるかもしれない。」

生徒たちは、自分たちに必要な情報を手に入れると、自然な流れでそれをどう活用するかという段階へ入っていく。



そして、単元の最後を迎えた。お客様役の生徒に対して一人一人がオリジナルのプレゼンをしていく。生徒の表情はいきいきとしていた。目的をもって、自ら必要と感じた情報を集め、主体的に作り上げた世界に一つしかないオリジナルのプレゼンだからかもしれない。さらに感心したのは、お客様役の生徒の様子である。社員役の生徒のプレゼンを真剣に聞くだけでなく、プレゼン内容について積極的に質問していた。課題に対しての思いが強い分、他者のプレゼンにも強い関心をもって取り組んでいた。その質問によって、社員役の生徒はまた思考する。お互いに高め合う関係がそこには生まれていた。



本校が目指す姿「大志を抱く（自分から取り組み、自分で考え、判断できる）生徒」「共生できる（他者の考えを認め、支え合う）生徒」「挑戦する（我慢強く最後までやり遂げ、言動に責任をもてる）生徒」がたくさん見られた単元となった。

# いろいろな工夫にあふれた数学

掛川市立原野谷中学校 池田 直茂

## 6月開始の授業

令和2年度入学式が無事に終了した…と思ったら、すぐに休校…再び生徒と出会えたのは6月でした。6月から授業が始まるという教員にとって経験がない1年が始まりました。入学して間もない1年生は授業についていけるのか。来年の3月には教科書を終わることができるのか。多くの不安を抱えたなかのスタートとなりました。

授業が始まって、実感したのが“学びのブランク”でした。生徒は学校に来る喜び、仲間と生活できる楽しさでいっぱいでした。授業にも一生懸命取り組んでいました。しかし、内容がなかなか定着しなかったり、家庭学習が不安定であったりしました。長期間の休校が生徒の学びのリズムを崩してしまっていたのです。

そのような特殊な年を“数学”の視点で振り返っていきましょう。

## 視覚化する数学、体験型の授業

1年間の数学の授業の最初は計算からはじまります。これは1年生でも、2年生でも、3年生でも同じです。計算は数字と $x$ などの文字だけなので、サンプルで法則さえわかれば簡単にできてしまいます。しかし、逆に言えば面白みがないと考えることもできます。そこで、数学を視覚化すること、そして、体験することを意識した授業を行うことで、長期の休校によって学びのリズムを崩してしまった生徒に刺激を与え、学ぶ喜びや楽しさを実感し、よりよい学びのリズムをつくれるようにしました。右の写真は、1年生の正の数・負の数の加法（足し算）の授業です。教室に巨大な数直線をつくり、そこに大きな矢印を持った生徒が、左右に動くことで加法の計算法則をみんなで発見するという内容です。また、プロジェクターなどのICT機器を活用して、発見した内容を明快にまとめました。生徒は楽しく活動しながら、計算法則を見つけることができました。



## 強力な助っ人登場！

さらに、そこに強力な助っ人が登場します。それは学校サポーターと学習支援員です。合わせて4人の方が原野谷中学校に来てくださっています。4人の学校サポーターと学習支援は授業において、教室全体に目を配り、鉛筆の動きが止まっている生徒がいたらスッと寄り添って支援をし、グループ活動においては、生徒の発言を的確にサポートしてくれました。常にメモとペンを手に持って生徒と一緒に課題を解いたり、班活動では生徒と一緒に考えたりすることで、生徒目線での支援を行ってくれました。そのため、集団での授業であっても、一人一人の学びのスピードや困り感に対応した学びを提供することができました。



さらに、原野谷中学校では地域の方も強力な助っ人として登場します。本校では、「数学塾」というものを行っており、主に計算問題に自信がない生徒に対して、地域の方と教職員が、それぞれの生徒の不安な問題やつまづきを解消するように支援や指導を行っています。何より素晴らしいのは、数学塾が終わるときに生徒が笑顔になっていることです。そのため、数学塾に参加を希望したいと多くの生徒が声をあげます。



## 計算力の継続と応用力の育成

2学期になると、数学の授業内容は、計算分野から関数、図形分野になっていきます。それに伴い読解力が必要な問題（文章問題）が増えます。ここで課題となるのは、文章問題への対応力の向上と1学期に伸ばした計算力の継続の両立です。そこで、プリントを活用した家庭学習を行いました。このプリントは半分が計算問題、もう半分が応用問題という内容になっており、このプリントを毎日継続して取り組むことにより、計算力の継続と文章問題への対応力を伸ばすことができました。



コロナの影響もあり、いつもと違う1年間でしたが、地域の方、学校サポーター、学習支援員の協力により、本校では数学だけではなく、どの授業も今まで以上に一人一人に寄り添った授業を行うことができたと思います。

## 自分と向き合う時間で未来を育む

掛川市立北中学校 萩田 駿

毎週ある道德の時間。道德の教科書を使い授業が始まります。

今日は第〇回目道德授業…。

「自分の考えを発表するのは苦手だな。」

「教科書の話を読んだらわかるじゃないか。」

道德の授業に対し、こんな思いを抱いている人もいるかもしれません。しかし、そんな消極的な声は北中学校からは聞こえません。

「自分の考えに共感してくれる人がいてよかった。」

「仲間の考えが自分とは全く違って意外でした。理由を聞いて感心しました。」

「先生の質問にドキッとした。よく自分のことを考えられたよ。」

授業後、こんな感想が聞こえる掛川北中学校。昨年から継続している道德研究についての取組を紹介します。

### 生徒が考えたくなる問い

毎週の道德授業に向けて学年授業検討会を行っている。数年前までの道德の授業では、物語の主人公の心情を問う発問が多かった。そのため、先生の発問の裏を先読みしたり、生徒が予想できてしまう授業展開になったり、マンネリ化した道德授業が行われていた。

そうした状況を変えるため、授業検討会で「生徒が考えたくなる」発問を考えたい。主人公の行動の理由を問い、生徒が葛藤する場面を設定する。考えたい場面に焦点を絞り教師の発問により葛藤が生まれ、生徒は「え、だって、、、」と表面的理解からさらに思考が深まっていった。他者から今までの自分の考えにはなかった意見を聞いたり、そこから自分の中で新たな思考が生まれたりする。この新たな視点での問いかけが生徒の考えたくなる気持ちをゆさぶった。

さらに、学年が上がるにつれて、道徳的価値について深く考えることができるようなテーマ発問へと切り替えていった。主人公の心情を問う発問の場合よりも、「本当の友情とは」「自然愛護とは」などの発問の方がじっくり問いに向かう生徒の姿が見られた。テーマ発問によって自分との関わりの中で考え、「今までは〇〇だと思っていたが、実は△△だった。」などの自分の考えの変容、深まりを実感していた。

### みんなはどう考えているの？

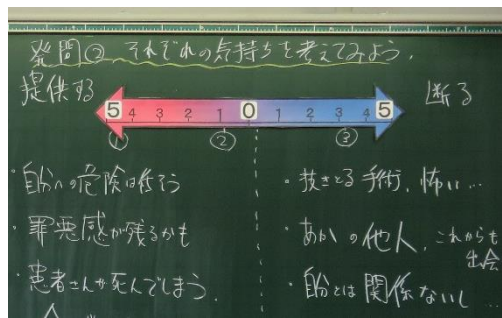
道德の授業の答えはひとつではない。授業で考える意見は、白黒はっきりとした明



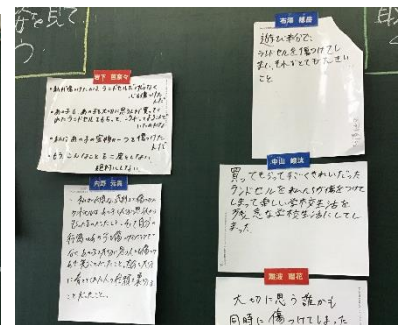
確なものではなく「80%くらいは賛成だけど20%くらいは反対の気持ちもある」など曖昧なものが多い。さらに言語化されていない部分にも生徒の思考が隠れている。そこで、自分の考えを可視化するために「思考ツール」を活用した。



「心情円」



「心情メーター」



「ミニホワイトボード」

自己の考えを可視化することによって、「なんで、そう思ったの?」「私も赤の割合が多いけど、理由は〇〇さんとは違ったよ。」など対話が生まれ自分と他者の違いを理解していった。

## 自分の生き方を見つめ直す時間

ある生徒が予定帳で道徳授業の感想を書いてきた。そこには「道徳の授業は物語を読んで主人公の気持ちやその理由を考える。国語でも同じようなことをする。しかし、国語と道徳の授業の違いは、道徳は最終的に自分のことを考えるところだと思う。」と書いてあった。まさにそのとおりである。



道徳の授業は主人公の行動や思考を通して、自分のことに振り返って考える。そしてその答えにも正解はない。これからの生活について「私はこうしてみよう。」「主人公のように強くは生きられないけど、この考え方は大切だと思った。」と考え、自分の生き方を見つけていく貴重な時間となっていた。

## 北中生の未来を育む場

2年間継続して取り組んだ道徳研究。北中職員の道徳授業に対する意識が変わり、授業も変わっていった。2年間で確立した「北中型道徳スタイル」は大切に継続していきたい。さらに、授業が変わることにより生徒の意識も変わっていき、生徒自身が道徳授業を大事にし、考えたことを自分の生き方や学校生活に活かしていこうとする姿が見られた。

北中学校の道徳授業は、資料と向き合い、自分と向き合い、自分事として真剣に考える時間になっている。教師からも生徒からも明るい声が聞こえる。

「今日の道徳の授業も楽しみだぞ」

## 平家物語～力が付いたと実感する授業～

掛川市立大浜中学校 八木 秀樹

古文と聞くと「難しそうだな」と身構える生徒が多い。時代背景が複雑であること、歴史的仮名遣いで表記され文章が読み取りづらいこと、現代とは異なる意味の古語があることなどが理由に上げられる。大浜中学校では生徒の主体性を大切にしながら学習を進めています。2年生の国語では、とても臨場感のある平家物語の学習が展開されていたので御紹介します。

### 扇の的を射られるか！？

国語の時間、生徒たちの姿は教室にはなかった。大きな歓声が体育館に響いている。「頑張れー！」「当てろー！」と応援する生徒たち。野球部のエースが45m先の扇に目がけてボールを投げる。しかし、ボールは無情にも扇に当たらず横を通過してしまう。何人もの生徒が挑戦するが当てられない。「あ～」「難しい～」落胆する声が体育館に響いた。

これは屋島での源氏と平家の闘いの再現である。平家の陣からこぎ寄せてきた一艘の小舟に掲げられた扇の的。これを那須与一が鎬矢で射切る場面である。距離は75m。風、波も大きい。失敗すれば切腹、義経の命令である以上断ることはできない。とてつもない重圧の中、二十歳前後の若武者が見事に成功させるのである。

無風の体育館でさえ45m先の扇に投げ当てることは難しい。実際に体験することで当時の武士の武力や技術の高さ、心意気や価値観を学び、物語の魅力に引き込まれていきました。



### 教室は屋島の合戦場！

次の時間に教室を除いてみると、教室が2つに分かれている。制服（鎧）を叩く生徒（源氏）と机（舟端）を叩き鳴らす生徒（平家）。これは那須与一が扇の的を射止めた後の状況を表している。敵、味方関係なく相手の技術力、精神力の高さに歓声を上げることは、この時代ならではの姿ではないでしょうか。しかし、次の瞬間、扇の立ててあった所に立って舞いを踊った平家の武士が射倒される。この瞬間、教室の半分（平家）は静まり返り、もう半分（源氏）はなお制服（鎧）を叩いて歓声を上げるのである。屋島の合戦場の様子が教室内に再現され、源氏と平家の武士たちの気持ちの変化を生徒全員で共有しました。

## 誰が言った台詞？

「あ、射たり。」（よく射た）

「情けなし。」（心ないことを）

古文には誰が発した言葉か分からない台詞がある。舞を踊った平家の武士が射られた後に発せられた言葉。これは源氏が言ったのか、平家が言ったのか、生徒同士が話し合って考えました。両軍のこ



れまでの様子を振り返りながら考える生徒、当時の価値観を踏まえながら考える生徒、本文の接続詞や助詞に着目して考える生徒など、様々な視点から考え、互いに意見交換することでより深く学ぶことができました。

## 充実した生徒の振り返り

本校の研修では、振り返りを充実させることを大切にしています。振り返りを通して、生徒に力が付いたことを実感できるようにしています。今回の平家物語を通して、どんなことを考え学んだのか。下のある生徒の振り返りからは、当時と現代の価値観を比較した深い学びを実感する様子が覗えました。

当時の武士たちの生き方・考え方について、あなたはどんなことを感じましたか？どんなことを考えましたか？ それぞれの武士の生き方や考え方に触れながらまとめよう。

舞を舞った武士や平家盛、熊谷次郎直実のことを考えている。戦中と平家、敵と敵しや、会話をすると事々あつたの  
 だと思ふ。今の戦争では敵の国の人と話すこともない。ましては殺しむ事もせず、ただ殺し合っているだけだと思つた。戦では、自分の名を名のり、相手と一対一をすす事もある。乱闘のさうにならず事もある。でも無関係な人を殺す事はあまりなかつたと思つた。戦争では殺す相手が誰だろうと関係ない。平家物語を讀んで、武士たちの戦い方を見て、戦争がどうも無意味で価値のないものかと思つた事を感じた。

平家盛は「自分には強いのと思つて、平家盛は「自分には強いのと思つて、熊谷次郎直実から相手を守るべき昔の文化が伝わってくる。今は皆平等であるが、昔は平等ではなかつた。皆が知っている、さうして違つた文化を感じた。



# 掛川市の未来に提言！～対話を通して考えを深める授業～

掛川市立城東中学校 杉山 高久

城東中学校では、「対話を通して考えを深める授業」をテーマに学力向上を目指して教育活動を行って来ました。その中で「小学校とのつながり」や「外部の人材の活用」などの手立てを行って来ました。今回は、中学校3年生の総合的な学習の時間と社会科の授業で学習した「掛川市の未来への提言づくり」という学習を取り上げて、城東中の学力向上物語を紹介しようと思います。

## 掛川とはどんな所？～小学校の学びとのつながりを大切に～

未来の掛川に提言をする前に、まずは、掛川市とはどんな所なのか知る必要があります。掛川市についての学習は、小学校3年生の社会科の授業で人口や面積、主な産業などについて学んでいます。そこで、小学校の時に使用した教材『わたしたちの掛川市』（掛川市教育委員会）を用いて、小学校の学習を思い出しながら、掛川市についての基本的な知識を確認しました。

城東学園の小中学校では、小中一貫校の設立に向けて小学校～中学校までの9年間の学びのつながりを意識した授業づくりを行っています。授業案作成では、その授業の教材に関わることを、小中9年間でのどのように学ぶのか表を作成して意識付けしています。

社会科の「学びの系統表」

5 学びの系統性	
小1	自分と身近な人々及び地域の様々な場所、公共物などとの関わりに関心をもち、地域のよさに気付く。愛着をもつことができるようにするとともに、集団や社会の一員として自分の役割や行動の仕方について考え、安全で適切な行動ができるようにする。
小2	
小3	身近な地域や市の地理的環境、地域の安全を守るための諸活動や地域の産業と消費生活の様子、地域の様子の移り変わりについて、人々の生活との関連を踏まえて理解する。
小4	自分たちの地理的環境、地域の人々の健康と生活環境を支える働きや自然災害から地域の安全を守るための諸活動、地域の伝統と文化や地域の発展に尽くした先人の働きについて、人々の生活との関連を踏まえて理解する。
小5	我が国の国土の地理的環境の特色や産業の現状、社会の発展化と産業の関わりについて、国民生活との関連を踏まえて理解する。
小6	政策の内容や計画から実施までの過程、法令や予算との関わりなどに着目して国や地方公共団体の政治の取組を捉え、国民生活における政治の働きを考える。
中1	学際横断的な身近な地域の調査を行うことで、調査方法や地理的なまとめ方の整理を理解し、地形図や主題図の読み取りなど、地理的機能を身に付ける。
中2	各地域の産業の立地や動向などについての調査を通して、中部地方の地理的特色を理解する。
中3	地方自治の発展に寄与しようとする市民や住民としての自治意識の醸成を図る。

## 未来の掛川の姿は？～掛川市役所企画制作部の方の講話～

更に掛川についての深く専門的に知るために、掛川市役所企画制作部の方に講話をしていただきました。講話では、日本や世界で起きている人口爆発や少子高齢化についての説明の後に、20年後の掛川の状況について説明していただきました。人口減少が進むこと、少子高齢化が進むこと、外国人が大幅に増加することが、私たちの日常生活や経済活動に大きく影響することを知りました。また、Society5.0の社会の様子を、動画を含めて説明していただき、AIなどの新たなテクノロジーを活用した「希望が見えるまち 誰もが住みたくなるまち」づくりについて説明を受けました。

その後、20年後の自分はどのようにしているのか？20年後の掛川はどんなまちであってほしいのか？について話し合い、今後作成する提言のテーマについて一人一人決めました。





## ICTを活用した調べ学習

総合的な学習の時間を使い、掛川市への提言したい内容ごとにグループを作成し、提言する内容について調べてまとめる作業をしました。掛川市の商業施設の分布図や最新の年代別人口構成など、提言する内容ごとに詳しい情報が必要になったときに、タブレット端末をインターネットにつないで調べ活動を行いました。今後、生徒に一人一台のタブレット端末が配付されるため、効果的なICT機器の活用方法を研修していきたいと考えています。

## 教科と教科の連携した学び

グループでまとめた未来の掛川への提言を発表しました。「ユニバーサルデザインを駅周辺以外にも普及すること」や健康を維持するために「スポーツがしやすいまちづくり」、「SNSを活用して観光を宣伝するまちづくり」などの提言が出されました。総合的な学習の時間を使って実社会の中から自分で課題を立て、情報を集めて分析して、まとめ・表現する力を育てることができました。

その後、社会科の学習で地方公共団体の政治のしくみや課題を学習するときに、総合的な学習の時間で出た提言を活用して掛川市の政治の課題について考える学習を行いました。



## 対話を通して考えを深める！

社会科では、総合的な学習の時間で出た未来の掛川への提言で「誰もが住みたくなるまち」にするためにどれを優先的に実施するべきなのか、様々な視点で考える活動を行った。初めに、様々な世代の視点で考えられるように、0～19歳、20歳～30歳、40歳～65歳、65歳以降の4つの年代で役割分担をし、グループで話し合い活動を行いました。次に、様々な地域の視点で考えられるように、山間部、中心市街地、中心部～沿岸部の間の地域、沿岸部の4つの立場に分かれて話し合い活動を行いました。

最後に、様々な世代や地域の視点を含めて、どの提言を優先的に実施するべきなのか自分で考えました。授業前では少なかった「高齢者の立場に立つと高齢者の福祉施設を増やしてほしい。」という高齢者の視点や、「命に関わることなので津波対策を優先するべき」といった沿岸部の視点を含めた意見がみられ、話し合いを通して様々な視点で考えを深めることができました。

このように、「対話を通して考えを深める授業」を来年度も継続して行い、資質・能力の定着を図り、学力の向上を目指していきたいと思います。

# 生徒が互いに学び合う授業を目指して

掛川市立大須賀中学校 池谷 貴弘

## 生徒が自ら疑問をもち、考えようとする姿

1年生の理科で、外に出て、身近な季節の植物を観察するという授業があります。春の植物を興味深そうに観察する生徒の一人が「花って何で咲いているのだろう?」と言い出しました。すると、周りの生徒たちが答えからは、「虫に止まってもらうため」「綺麗に見てもらうため」「種をつくるためだよ」など様々な答えが出てきます。そのうち、花を摘んで観察する様子や、周りの人と話し合っている様子がみられました。多くの意見が出ましたが、そのほとんどは正しい解答とはいえないまでも、大きく間違っていないようです。

そこで、この單元ではその生徒の疑問を中心にして授業を組み立てることにしました。大須賀中学校の授業では、生徒自身が疑問をもち、考えたいと思えるような組み立てを行い、生徒たちから出た言葉や疑問を取り上げ、課題とすることで、生徒の意欲や考える力の向上を意識しています。

## 考えること、より難しい課題に挑戦することが楽しい

「植物の分類はどのように行われているのか」について自分たちで植物の作りを調べながら共通点や違う点を出し合いながら話し合いを行いました。そこで、一人の生徒が花の付き方の違いに気付き意見を言おうとしたのですが、「待って、言わないで、自分で考えたい」と別のグループからこのような声が聞こえました。生徒たちは身近な疑問や課題に対して、自分で答えを見付けたい、より面白い問題に取り組みたいと考えています。生徒にとって、簡単に解けるものではなく、仲間と協力することで初めて解決することができるような問いを与えることで主体的・対話的で深い学びを実現させることを常に意識しています。「やった!」「できた!」「すごい!」課題が解決できたときの生徒たちの感動の声は、授業中の素直なつぶやきとして表現されます。

大須賀中では、より発展的な“ジャンプの課題”を單元の中に設定するなかで、大きな課題に集団で取り組む姿勢と達成のためのプロセスを大切にしています。



## 自分の意見を誰かに伝えたい

生徒は課題に対して一生懸命に考え、その考えを誰かと共有し、意見を交換し合ってより良い考えを練り上げたいと考えています。課題に自分なりの解答や解釈ができた生徒たちは、自分の考えや発見、疑問を伝え合い、意見を取り入れたり、感化されたりして、自分の考えや作品を深化させていきます。その際に、タブレットなどの ICT 機器を活用することで、より早い意見交換を行うことができ、自分の意見や相手の意見をデータとして保存することで繰り返しの編集を行うことができます。また、これまで小さなノートやプリントで図解や説明をしていたことが、大型テレビの利用等で全体と交流することもできました。これからは一人一台タブレットを活用し、説明をしながらリアルタイムで線を引いたり、意見を書き加えたり、自分の意見をより分かりやすく伝えることができます。



## 疑問を全員で追求していく

植物の単元の総まとめとなる課題として「植物はどのように進化してきたのだろう」という既習事項を応用する、より発展的な学習課題を設定しました。グループ学習を行う際には全員が参加できるようにジグソー学習を行いました。「コケ・シダ植物のからだのつくり」「被子植物と裸子植物の違い」「子孫の残し方」「生育場所の違い」など、一人ずつグループ内で違う分野の問題ごとに分かれて、エキスパート学習を行い、学習した内容を元のグループに持ち寄り、一つの課題に取り組むというこの学習法は、どの生徒もエキスパートグループで理解した内容を、説明しなければ、グループの課題が解けないようになっているため、全員が理解をしようと努力をしました。「ここが分からないから教えて」「あのホワイトボードが気になるから意見を聞きに行っても良い？」などの声が、グループ学習の最中にはこのような声がどのグループからも聞こえてきました。

大須賀中学校では、授業、生活、行事等を通して、生徒同士がお互いにコミュニケーションを取り合い、「分からない」「教えて」と聴き合える環境づくりを意識しています。学習の得意な生徒も苦手な生徒も全員が授業に参加し、「学び合う」学習集団作りを目指しています。